

県営ほ場整備事業(昭和51年度)

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

下の段・五升蒔・駒潰遺跡

1977

長野県上伊那郡宮田村教育委員会
南信土地改良事務所

序

昭和51年度県宮は場整備事業の施行に伴い、村内における 下の段 五升
時 駒つぶれの三遺跡の緊急発掘調査を実施した。

下の段遺跡は古くから「小田切城址」と呼ばれていたところであり、今回の調査は多くの人の注目するところでもあった。また、五升時遺跡は、縄文時代の土器が農耕時に数多く表採されており、共に注目されていた遺跡である。今回の調査の結果 下の段遺跡は、縄文早期末 同中期 平安鎌倉時代を経て、桃山～江戸時代にわたる重要な遺跡であることが確認されたことはまことに意義深いものがある。五升時遺跡は縄文時代中期 後期 土師 中世の遺跡として注目に値する遺跡となった。又駒潰遺跡については遺構は確認出来なかったが、縄文中期 古墳時代の遺物が発見されて、遺物包含遺跡であることが明らかとなった。

ここにその報告書を刊行するに当り関係各位のご協力に対し深甚なる感謝と敬意を表する次第である。

昭和52年3月

宮田村教育長 林 金 茂

例 言

1. この調査は、は場整備事業に伴う緊急発掘で、調査は兩個土地改良事務所の委託により、宮田村教育委員会が実施した。
 2. 本調査は、昭和51年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は遺跡の主要部分を主体に記述した。資料の再検討は後日の機会にゆずることとした。
 3. 本報告書の執筆者は次の通りである。
丸山弥生 赤羽義洋 友野良一
- 図版作成者
丸山弥生 平沢八千子 赤羽義洋 友野良一 小木曾清
4. 土器復元は小木曾清
 5. 本報告書の編集は、主として宮田村教育委員会があたった。

100
100
100

下 の 段 遺 跡

第 1 篇 下 の 段 遺 跡

目 次

序	
例 言	
目 次	
第 一 篇 下 の 段 遺 跡	1
第 I 章 遺跡の立地・環境	1
第 1 節 位置と地形	1
第 2 節 地質	2
第 II 章 周辺の遺跡と歴史的背景	3
第 1 節 周辺の遺跡	3
第 2 節 歴史的背景	4
第 III 章 調査の経過	9
第 1 節 調査に至るまで	9
第 2 節 発掘日誌	10
第 IV 章 調査の結果	15
第 1 節 調査の概要	15
第 2 節 縄文時代の遺構と遺物	15
第 3 節 中世の遺構と遺物	18
第 V 章 調査のまとめ	22
第 1 節 早期の土器	22
第 2 節 館址について	24
第 3 節 花粉分析	26

第1章 遺跡の立地環境

第1節 位置と地形

下の段遺跡は長野県上伊那郡宮田村南割2770番地に所在する。遺跡は村の西部地区に位置し天竜川の支流一級河川小田切川の左岸段丘上にあたる。遺跡に至るには、国鉄飯田線宮田駅より西方1.5km、徒歩25分、標高694m東南に張り出した小丘頂に位置している。

伊那盆地は、木曾山脈と伊那山脈の間を流れる天竜川流域の谷盆地で、北は辰野町から南は天竜峡にいたるまで長さ60km、幅4～10kmの範囲の平坦な面である。この平坦な面は、竜東地域では赤石山脈、伊那山脈から流れ出す天竜川支流、三峰川・小沢川をはじめ大小の各河川によって形成された複合扇状地と、天竜川に沿う河岸段丘氾濫原とから形成されている。

竜西地域では、木曾山脈の東斜面を流域とする天竜川の各支流は、北から横川川・帯無川・大泉川・小沢川・小黒川・小田切川・大田切川・中田切川・与田切川・松川等の各支流によって形成された複合扇状地と天竜川に沿う河岸段丘の氾濫原によって形成されている。

次に、この大田切扇状地北側についてやや詳細に窺ってみると、現在駒ヶ根市との境界をなす大田切川の上流から分れる小田切川をはじめ、そのほか西方山塊から流れ出る水を集めて流下する寺沢川、この河川は、新田上の宮地籾小田切川に合流する。押手沢川・城の沢・宮の沢は大沢川に合流する。長坂の川は伏戸の下で堂沢川となって天竜川に注ぐ。これらの小河川は、大田切複合扇状地の上に更に小扇状地を形成している。この扇状地上に先史・原始時代の遺跡が分布する。また、これ等小扇状地以外の一般的大田切扇状地には、大田切川と小田切川に挟まれた駒ヶ原台地や、小田切川左岸段丘上の遺跡は、天竜川合流点に至るまで、縄文早期・中期・後期・弥生・古墳・中世の諸遺跡が分布する。また、西の山塊より流れ出る小河川は、寺沢川が小田切川に合流する地点より、井筋で押手沢合流点につなぎ、大沢川と言う実質上の河川となって、郷倉から、田中北～宮田北町大西から伊那市下牧の界を流れ天竜川に注ぐ。この大沢川流域には、神ノ芝大湿地帯をめぐって、巨匠外遺跡、姫宮遺跡の弥生時代の水田址、田中西遺跡、向山遺跡、田中北遺跡、北田南遺跡等著名な遺跡が分布する。また、姫宮遺跡の東田中南遺跡は、最近の東山道宮田駅址の研究でクローズアップされて来た遺跡である。その範囲は小田切川段丘上より北は大沢川辺までと、東は国鉄宮田駅附近迄の広大な面積に亘ることが確認された遺跡である。縄文早期末から前期初頭にかけて日本的に著名な中越遺跡は、南は小田切川河岸段丘上より、北大沢川に挟まれた台地に分布する。以上宮田村の地形と遺跡の所在を概略述べてきたのであるが本報告書の「下の段・五升蔦」遺跡の地形の説明がやや不十分と思われるので、聊か詳細に窺ってみると「下の段遺跡」は、南側は小田切川段丘に接し、その高さは5m～10mと余り高低差のない舌状の小台地状をなしている。遺跡の北側は古くは押手沢川の支流が流れている比高2m～

4 m、幅 50 m ～ 90 m の小河川があったことが今回の調査で確認されるに至った。この名もない小河川は、下の段地籍で小田切川に合流する。

また、この小河川の上流部は、唐木沢の南から五升蒔遺跡の北辺まで達するようである。それから上流部は寺沢川扇状地か、押手沢扇状地か区別し難い状態となっている。この扇状地周辺は大湿地帯である。下の段遺跡は段丘寄りの小高い乾燥した細長い地域に分布する。

五升蒔遺跡は、下の段遺跡の西方 300 m 同じ面の段丘上に所在する。南側は小田切川の段丘上に境し、その比高は 4 m を数える。小田切川の左岸段丘は、この五升蒔地籍が起点になっているようで、それから上流部は段丘らしきものは明かでない。遺跡の北は先に述べたように大湿地帯で、泥炭層の下部から直径 1 m にも達する埋木が発見される。南側段丘下には、この界隈一番の清水が湧いている。五升蒔遺跡は、こうした自然的条件に恵まれた場所に所在する遺跡である。

第 2 節 地 質

下の段・五升蒔遺跡の基盤をなす地層は、大田切扇状地を形成した。凝石混りの砂礫層である。この砂礫層の上に新期ローム層が堆積した層序となっている。遺跡の東小田切英夫氏の住宅附近は、移動していないロームが発見されるが、堀から西辺は砂混りの二次堆積ロームが出るところを見ると、押手沢の氾濫時に形成されたロームかも知れない。遺跡地及び南段丘面に直径 5 m 以上の大転石が露呈している状態を見ると押手沢の氾濫を物語っているように思われる。駒石もその一つである。現在遺跡の北側は水路になっているが、古く押手沢川が流れていた川敷であったことを今回の調査で確認した。その川幅は 40 ～ 70 m、深さは 2 ～ 4 m を測る。

その後泥土が堆積し、大湿地帯を形成したものである。この堆積開始を知る手掛は明らかでないが、泥炭層の花粉分析個所の断面から縄文時代中期の土器片が発見されているので、今後花粉分析上一つの目標ともなろう。現在花粉分析は信大農学部小林喜江氏が主になり分析中である。今回は中間報告を寄せてもらった。

花粉分析個所の地層は、現に水田であったので、旧地形は知る由もないが、Ⅰ層上部赤土、下部は礫が混じる層 63 cm、Ⅱ層黒褐色の泥炭で、これより資料を採取、Ⅲ層は、青色粘土層の混ざり層 20 cm、Ⅳ層は礫層、これより下部は洪積層である。資料は、Ⅲ層より 2 cm 毎 27 サンプル採取した。

五升蒔遺跡 本遺跡も下の段遺跡とほぼ同様な地質構造を有している。まず、基盤は大田切扇状地の組成されている転石混り砂礫層、その上部に砂質を含んだローム層、黒色土層と言う層序である。遺跡の南側は、大正年代に南傾斜地を平にして水田化している。この開田の時、縄文中期の土器と石棒が多く発見され、特殊な祭祀遺跡ではなかったかと言われていた遺跡である。段丘の下は清水を集めた小川が流れ、その南側原の田は湧水が多い冷田が下の段へ姫宮弥生遺跡南段丘下に続いている湿地帯である。また、五升蒔の西方は押手沢・寺沢扇状地末端に広がる大湿地帯に面している。今回の土地改良工事で、いたるところから埋木が発見され注目を引いた。五升蒔遺跡は小田切川段丘の排水の良い場所に設けられた遺跡である。

第Ⅱ章 周辺の遺跡と歴史的背景

第Ⅰ節 周辺の遺跡

大田切扇状地は行政区画では大田切川を挟んで駒ヶ根市赤穂区上穂沢川北部と、北割宮田及び伊那市西春近藤訪形、赤木、下牧地区に広がっている。その面積は175キロ平方メートルである。

大田切川を主軸とし北に小田切川、大沢川堂沢川が流れている。南には古田切川、ネズミ川、上穂沢川が流れいづれも天竜川に注いでいる。これ等の河川沿岸には東西に遺跡が模式的に分布しているのがこの地域の特色である。このうち、尖頭器を出土する遺跡は、河川の中流と下流に占地する。縄文草創期の遺跡は河川の中流台地に発見される。縄文早期の遺跡は河川流出の山麓台地及小扇状地、河川中流域に多い。前期遺跡は山麓から河川中位段丘上が一般的である。一部天竜河岸に面した段丘上に占地している遺跡もある。縄文中期の遺跡は扇状地全般に広がる。縄文後期・晩期は、山麓地帯、小河川の扇状地中腹、河川中位段丘上から下流台地等に分布する。弥生時代前半は、山麓の小河川の出口や中位河岸段丘上に見受けられるのが一般であるが、例外には天竜川段丘に占地している例もある。弥生中期の遺跡は大田切扇状地には今のところ見受けられない。弥生後期になると、中小河川の河岸段丘上や沼地周辺、小さい谷間、天竜川の底地、河岸段丘上に占地する。以上が大田切扇状地の遺跡分布のあらましの状態である。さて、下の段・五升蒔遺跡の周辺の遺跡を窺ってみると、まず、中央道調査団で発掘調査された遺跡では、高河原遺跡（縄文中期）熊野寺遺跡（中世～近世）釈迦遺跡、（中世～近世）城山（中世）宮の沢遺跡（縄文中期末）、（平安時代）。元宮神社東遺跡（縄文早期・中期初頭・縄文早期末・前期・後半・歴史時代柱穴）。天白古墳は、古墳時代（後期）。円通寺遺跡、灰砂陶器と出土する遺跡、柱穴（奈良時代）。

次には場整備で調査された遺跡。田中北遺跡、（縄文中期・古墳時代・平安時代）古町遺跡（南北朝・室町時代）木戸口遺跡（縄文中期・平安時代）、広垣外遺跡（縄文中期・土師・平安・中世の遺跡）向山遺跡、（縄文草創期・縄文早期・中期・弥生後期）。矩宮遺跡（縄文早期・前期・中期・弥生後期・土師）滝ヶ原遺跡（縄文中期・古墳時代）下の段遺跡（縄文早期・中期・中世・居館址）五升蒔遺跡（縄文中期・縄文後期・中世）松戸遺跡（縄文早期・縄文中期・平安時代・中世・中世墓址）駒積遺跡（縄文中期・中世）。

学術発掘の行なわれた遺跡、中越中期・縄文前期初頭1次～5次住居址56戸と調査。

古墳 三つ塚古墳（発掘昭和27年古墳時代後期）鳥林古墳（昭和51年破壊後調査）古墳時代後期。

その他の遺跡、中越西（縄文前期・中期）中越南（縄文中期）作道（縄文中期授頭）田中下（縄文早期・中期・平安・中世）田中下（縄文早期・中期・中世）伏戸（中世）柏木（縄文中期・中世）真米（縄文後期）上の宮（中世）新田丸山（縄文中期）二ツ屋（縄文中期）駒ヶ原下（縄文中期）西垣外（古墳時代）狐塚（弥生中期？）中越下縄文中期 十三塚（中世～近世）山伏家

(江戸時代)稚児塚(中世)郷倉(江戸時代)佃田(奈良～平安)米山A(縄文中期)北の城(戦国)下の城(下の城 室町～戦国居館)城山(室町～戦国)

第2節 歴史的背景

1. 向山遺跡 本遺跡は、田中部落の西北大沢川の右岸、段丘上に所在している。遺跡の標高は666mを測る。遺跡からは、縄文草創期表裏縄文の住居址、竪穴、マウンド等の遺構と多くの土器及び石器が出土した遺跡である。縄文式時代最古の住居址として重要な遺跡となった。上・下伊那で発見されている表裏縄文を出土する遺跡を参考までにあげてみると駒ヶ根市舟山遺跡は上穂沢川右岸段丘に所在し、その標高は666mを計る。向山遺跡とまったく同じ標高に位置する。舟山遺跡では表裏縄文土器は出土したが直接結びつく遺構は確認されなかった。飯島町七久保高遠原山祇神社遺跡から神村透先生が表裏縄文土器を採取されているが、出土状況は不明である。山祇神社は伊那松川の左岸段丘に接している遺跡である。遺跡の標高は710m。向山、舟山両遺跡より34m高い所に位置している。下伊那郡高森町山吹川子石遺跡。本遺跡は中央道埋蔵文化財調査団の手によって発掘された遺跡で、地形は大沢川の扇状地に所在する。遺跡の標高は640～655の間に分布している。調査は南北16m、東西18の全グリッドを発掘、表裏縄文594片、表面のみのもの24片、押形文20片、爪形文1片、石器は、剥片の出土が多い。尖頭器、有尖頭器、石鏃、ナイフ、エンドスクレイパー、スクレバ、曾根形コア、礫器、摩製石斧、砥石、横刃形石器、アンビルストーン、ハンマストーン、石定形石器等が発見された。その外、縄文中期の住居址、縄文後期の住居址が発見された。向山遺跡からも、押型文、茅山系土器、縄文中期の住居址、弥生後期の住居址が発見されたことを付記しておく。復合遺跡として川子石遺跡と類似した面がある。川子石遺跡からは遺構らしきものは認められなかったようである。

2. 押型文遺跡、宮田村発見の押型文遺跡、姫宮遺跡、小田切川左岸段丘上に所在する遺跡である。遺物は発見されているが、遺構は確認できなかった。姫宮遺跡は縄文中期、縄文後期、弥生時代の住居址1軒が発見されている遺跡である。

中越遺跡 小田切川と大沢川の間に挟まれた台地に所在する遺跡である。押型文土器をはじめ縄文前期初頭の住居址56軒が発見され、日本に於けるこの期の代表的遺跡である。遺物は東海地方の木島氏に比定される土器、諏訪地方駒形遺跡出土遺物、神ノ木式、関東の関山式に比定される遺物が出土する遺跡である。この外中期の土器も発見されている。遺跡の範囲は、旧宮田中学跡から中越神社附近迄で広がっている大遺跡である。

田中東遺跡 田中の北を流れる大沢川の南、田中段丘の東側に所在する遺跡である。向山遺跡発見の格子目文土器とまったく同一の土器が発見された。発見地は日本発条宮田工場敷地続き木下進氏の畑である。向山遺跡の南向山嘉人氏の住宅附近発見の格子目文土器とも類似している。このことから推測すると、田中の段丘上下は或は押型文の大遺跡かも知れない。今後注意しなければならない遺跡の一つである。

下の段遺跡 今回報告する遺跡である。押型文土器は遺跡の西北、粕畑・茅山系、入海等の遺

物が出土する箇所から発見された。押型文土器に直接関係する遺構は確認されなかった。下の段遺跡は押型文土器から縄文早期末、特に関東系、東海系の土器が多量に発見された遺跡で、長野県でも数少ない遺跡の一つとなった。この外、中期初頭、中期、土師の遺物。特に本遺跡は中世豪族の居館址であることが確認された遺跡である。

元宮神社遺跡 本遺跡は、中央道埋蔵文化財調査団によって調査された遺跡である。長坂川の扇状地山麓部に所在する。遺跡の標高は759 mを測る。発見された遺構は縄文早期の住居地3、中期初頭住居址1、縄文早期末、前期後半、中期初頭に比定されるピット8、歴史時代の柱穴址1、及び同時代と思われるピット30ヶが発見された。そのうち縄文早期の住居址は信濃に於ける早期 研究に重要な役割を果すであろう。第1号住居址からは東海地方柏畑、関東地方鶴ヶ島台、茅山下層、茅山上層等が出土した。第2号住居址からは、第1号住居址に比較して、押型文、上の山式、入海式等の出土を見た。出土遺物からして、下の段出土の早期末東海と関東系の土器との関連性に於いて今後の研究上好資料という点で重要視されよう。

松戸遺跡 本遺跡は昭和51年度は場整備事業に伴い、発掘された遺跡である。遺跡は押手沢の扇状地南端に位置する。標高720 mを測る。遺構は縄文早期東海系の柏畑式土器を伴出したマウンド、縄文中期の住居址5軒、灰釉陶器を伴出する平安時代の住居址1軒、中世掘柱穴址、鎌倉時代の骨壺を出土した墓址、中世陶器の内には仏教的な性格をもったものなど、熊野寺遺跡の前遺跡として注目に値する遺跡である。

五升寺遺跡 寺沢川扇状地の南端と小田切川左岸の段丘が始まる地点に位置する遺跡である。遺跡地の標高は696 mを測る。本遺跡は大正の頃段丘側の一部を開田した折、多くの石岸と土器片が出土したことにより、発見された遺跡である。今回のは場整備では、縄文中期の住居地2軒、土城、中世と考えられる柱穴址等の遺構と、縄文中期初頭、縄文後期の土器・石器及び、中世の陶器片が発見された遺跡である。

2. 鳥林古墳 大正時代には小田切川の右岸段丘上に三基所在したと耕作者清水惣太郎氏は話してくれた。私は幼少の頃2基存在していたことを記憶している。昭和になって、駒ヶ原の耕地整理事業が行われた時、東塚の北東側が削り取られた折、土師の高杯が石油箱一杯も出土したと伝えられている。この遺物は当時宮田小学校に保存されてあったが、中学の新校舎が建られた折小学校から中学に保管替となったという。その中学も新しい校舎が軌道西に移った折に処分されてしまった。他に借出した高杯も現在行方不明である。こうした経緯の中で、昭和51年冬国道153号線に営業している建築業者が無届で破壊してしまった。教育委員会は破壊後出来るだけの調査を行った結果、重刀・刀子・須恵器等を採集することができた。そうしたことから6世紀末の古墳であることを知ることができた。宮田の古墳では一番古い古墳に属することが確認された。

三つ塚古墳 本古墳は昭和27年道路改修の折に発掘された古墳である。古墳の位置は、鳥林古墳西方小田切川の右岸段丘北に所在する。発掘の担当者は国学院大学教授大場善雄博士によって調査された古墳である。調査の結果東塚からは、主体部を発見することが出来なかったが、西塚からは木棺埋葬の骨と刀子、鉄鏃、須恵器等が発見された。これ等の発見遺物から鳥林古墳

より僅か下る時期の古墳であることが確認される。

天白古墳 下伊那市の著者故市村成人氏が東山道宮田駅址の研究の折に発見された古墳である。その当時地名が馬込めだから馬込古墳と命名されていたが、中央道埋蔵文化財調査団では、古墳の上に天白神社が向られているので、天白古墳と改名して発表された。調査の結果、横穴式古墳で、出土遺物からして7世紀半ばの古墳であることが確認された。宮田に於ける三つの古墳は殆んどが発掘された。この結果6世紀～7世紀にかけて営まれたものであることを知ることができた。宮田村に存した古墳の研究は、今後村に於ける古墳文化を知る上に重要な役割を果すことであろう。

3. 広垣外遺跡 本遺跡発見の住居址からは鬼高期の壘が出土した。大久保西垣外遺跡も広垣外に続く時期の遺跡である。鬼高期に属する遺跡は現在のところ以上二つの遺跡の外には確認されていない。宮田村としては、この期資料が不足している。

4. 土師に灰釉を伴う遺跡としては、円通寺遺跡があげられる。出土遺物からして折戸54号室に相当するところより10世紀に比定されよう。

元宮神社東遺跡からも折戸53窯式が発見されている。

松戸遺跡からは、元宮東遺跡と同様折戸53窯に比定出来る陶器が発見されている。

下の段遺跡からも、折戸53号窯に比定出来る灰釉陶器が発見された。

田中遺跡群からも灰釉陶器の古い方から新しい方まで発見されている。

北割の長坂、宮の沢扇状地も、田中遺跡群と同時の灰釉陶器が発見されている。おそらく宮田全域に分布しているものと考えられる。現在田中遺跡群には各地著毎に分布調査が集中的に行われている。今後こうした調査を全村的に広げる必要がある。


5. 鎌倉時代・室町時代の遺跡

古町・柏木・広垣外・松戸・五升磚・下の段・田中遺跡グループなどが鎌倉・室町時代の遺跡としてあげられる。そのうち古町・広垣外の両遺跡は報告書が刊行されている。松戸・五升磚・下の段の三遺跡は現在報告書作成中である。

A. 北の城址 宮田村の中越部落の東北天竜川に面した城址である。まだ調査が行われていないので明確なことはわからないが、南北朝の頃から戦国にかけての中世城郭であると考えられる平山城である。城主はおそらく中越氏ではなかろうか。

B. 下の城 北の城の南大沢川が天竜川に合流する右岸段丘上に所存する居館址である。東西40m南北40余m、四方に土塁をめぐらす居館である。居館の西は耕地整理のため破壊され詳細は不明である。本居館は中越氏の所有していたものであろう。

C. 城山 中央道遺跡調査団の手により調査された山城である。標高900m、釋迦堂扇状地との比高は160mを誇る。城郭は東西25m南北55mの小規模の山城である。堀と土塁がめぐらされている。堀の上幅は10m、下幅埋って明かでないが2.5m、深さは7.75mと深い空堀である。

内堀は幅 5.5 m、下幅 2.0 m、内側の土塁迄は 7 m を取る。—— 中世期の型式 10 型式に該当する型式である。内側には石垣をめぐらす。東に三ヶ日郷郭と言われる三ヶ日形の郭が見られる。これ等の型式から考えて戦国山城と思われるのである。

D. 小田切城 古くから小田切城の名が知られているが、今迄城郭らしきものは発見されていない。昭和 51 年度は場整備事業に伴う埋蔵文化財の調査が行われるにおよび、一部の研究者が呼称していた小田切城ではないかと言う箇所を調査したのである。調査の結果堀を境に主郭は東西 100 m、南北 60 m、四方を土塁をめぐらす。外郭は東西 60 m、南北 55 m、南は小田切川の段丘に面する。北側は押手沢の末流が流れた自然的小河川を利用した堀が回っている。いわば、自然丘陵を利用した中世居館址であることが確認された。居館を文献上から窺うと、「吾妻鏡」によれば治承四年（1180）九月甲斐の源氏武田信義・一条忠頼等は伊那大田切郷に菅冠者を誅ぼしたが、「平氏方人等信濃国」となることによって、当時平氏および平氏党の様子をうかがうことができるのである。小田切五郎良調が菅野の反則を討った功により、宮田附近に食邑を賜わり宮田に居住、地名をとって、小田切氏を名のったとある。一説によれば小田切氏は一条次郎忠頼の部下とあるが、もともと一条次郎忠頼に伴っていたものであるかは明かでない。大田切城の戦いは実際戦いが行われたかどおか、「吾妻鏡」戦わずして館に火を放ち自殺、千根上河原に相果云々とある。千根上河原は今のネズミ川の支流のことでと推測される。「大田切郷の城」と館とはその距離離れの場所にある筈はない。今の荒城は吾妻鏡に言う大田切郷の城とあるものに該当するかも知れない。中割原には中世初期にまつわる遺跡が分布していることよりして、十分考慮に入れておく必要がある。また、光前寺も初期は平安時代の創建にかかるとある点など今後の研究課題である。大田切城の戦いは行われずとある点、小田切氏はその功によりて、食邑を賜わったと伝えられているが、小田切氏はもともと一条次郎忠頼に従軍して来て宮田の地に落付くと言うのも、聊か不自然である。それに食邑を賜わる。食邑とは大領の意ではないと考えるにしても、どうもこの記事だけでは従軍して来てこの地に止まり小田切氏と名のったと言う言伝えを、そのまま受け入れられない点もある。小田切氏は、元々この地方の小豪族であって、大田切城の戦功により宮田の地の一箇所を食邑として賜わったと考えられんでもない。いずれにしても小田切氏の発祥は詳らかでない。小田切氏が歴史に明かになったのは治承 4 年（1180）からである。小田切氏の鎌倉末期迄の消息を知る手がかりをつかめないのが実情である。

大塔合戦 応永七年（1460）小笠原長秀は伊那の勢をはじめ二百余騎を率いて、大塔合戦、信濃一國へ諸族をあげての合戦であった。伊那地方は小笠原氏の基盤であった。その大部分は守護軍に参加していた。諏訪氏は反守護軍であった。上伊那地方戦に参加した諸族は、（大塔軍記）藤沢右京亮・笠原中務丞・春近人々・山田新左衛門・小井出某・中越備中守・宮田大和守・上徳伊豆守・片桐中務丞・同田嶋・飯島若狭守・田切五郎七・赤須孫三郎。（大塔物語）赤須又三郎中越備中守・宮田大和守となっている。いずれも宮田氏と中越氏は顔を出しているが、小田切氏の名は見えない。この頃小田切氏はどおしていたのか明かでない。あるいは、春近人々の中にはいつていると解する人もいる。

結成合戦 永享13年(1400)下野の結城氏朝が滅ぼされた合戦である。関東管領足利持氏の遣い、安王・秦王を擁して兵を挙げた事件についての軍記である。この時信濃の豪族は幕府の命を受けて、信濃守護小笠原政康の指揮下で戦っている。政康は軍勢を30組に分けて交替で警備に当らせた。その組分の内容が「結城陣番帳」として今日に伝わっている(宮原大成附録)その中から上伊那地方の諸族を拾ってみると、十一番、藤沢殿、十四番、諏訪信濃守殿、^(草)大原殿代、中沢殿代、甲斐沼殿代。十五番、小田切殿、二十四番、飯島殿、片桐殿、小井貞殿、宮田殿、先に述べた「大塔合戦」に出陣した諸族と併せ考えると、室町時代前半における上伊那地方の主な豪族分布が理解される。ここで小田切祝が出来る。

応仁の乱後、幕府の威力が落ちその支配力がなくなると、幕府に馴れていた諸将は先を競って国元に帰って、自己の勢力を作る態勢となる。いわゆる、群雄割拠の時代となる。信濃小笠原氏も昔の威勢はなく、一族内部分裂する。北信では村上氏の北信統一があり、諏訪大祝家の惣領家との対抗などの動乱があった。これらに巻込まれた各郷の地侍たちは、それぞれの郷に入って、自己防衛のために城を築き、群雄の独立の傾向にむかっただのである。今日郷土に残っている数々の城址は、室町から戦国にかけての群雄独立の遺物であると考えられている。かくして、天文の時代になると、これ等群雄は次第に統一され、信濃では、北信村上・弥津氏、南信は小笠原両家と諏訪氏などが、大豪族として小豪族を従えるようになる。高遠氏は、これ等大豪族のように及ばなかったが、高遠地方に勢力を保っていたのである。かかる状況下において、北から上杉氏甲斐からは武田の侵略のきざしが信濃をうかがっていた。ここで「大塔合戦」や「結城合戦」などに参加した上伊那の豪族一地侍は「諏訪御符礼之古書」に見えている氏人等による諸族は、文安三年(1446～延徳二年1490年)の間45年、諏訪御射山の祭礼に奉仕した記録によると、赤須氏、「大塔合戦」に赤須又三郎・赤須孫三郎。「結城合戦」に赤須殿「諏訪御符礼之古書」に、赤須伊勢守数康・赤須為頼・赤須大隅守為有。「大塔合戦記」には、中越氏は、中越備前守「結城合戦」「御符礼之古書」にも見えない。

宮田は、「大塔合戦」宮田大和守「結城合戦」に、宮田殿、「御符礼之古書」に、宮田源有清・宮田大和守有満・宮田松夜叉・宮田有信。「大塔合戦」に、山田は、山田新左衛門、「御符礼之古書」山田伊那掃部助康；山田備前守有盛、山田彦次郎(三五記)清原真人盛政、小井出は、「大塔合戦」小井出某、「結城合戦」に小井出殿。上徳は、「大塔軍記」に上徳伊豆、「結城合戦」には上徳殿とある。片桐は「大塔合戦」に片桐中務丞、「結城合戦」には片桐殿、「諏訪御符礼之古書」には、片桐式部丞頼為・片桐兵庫頭為光・片桐民部大輔為光・片桐原為貞。飯島、「大塔合戦」には飯島若狭、「結城合戦」には、飯島大和守為宗・鎌島伊予守為頼・飯島紀伊守為頼。田切氏、「大塔合戦」には田切五郎七。箕輪は、「大塔合戦」には藤沢右京亮、「結城合戦」は藤沢殿、「諏訪御符礼之古書」藤沢遠江守道政・藤沢遠江守信有。笠原、「大塔合戦」に笠原中務丞、「諏訪御符礼之古書」に笠原美濃守貞政・「守矢満実書留」大草「結城合戦」に大草殿「御符礼之古書」に大草民部少輔宗政・大草香坂左衛門有宗・大草沙弥昌広・香坂宗たぬ、「高坂文書」中沢、「結城合戦」に中沢殿代、中沢衛門尉「高坂文書」甲斐沼、結城合戦に甲斐沼殿、殿島、「御符礼之古書」に殿島神林越後守盛兼。「結城合戦」に小田切殿。藤沢庄(高遠

「結城合戦」「諏訪信濃守殿」「諏訪御符礼之古書」に諏訪信濃守繼宗・満繼「鉾持神社文書」・代官保科筑前守家部・保科弾正貞親・箕輪大出、「御符礼之古書」に福島大和守政兼・藤沢出羽守有兼・同有世。以上の豪族は当時この地方の旧族で、そのなかには鎌倉からのものもあるが、これ等の豪族はさして勢力が大きくなり、諏訪氏や小笠原に従属していたものと思われる。また、その本拠も昔からの郷村に勢力を張っていた。文明以降になると高遠氏の配下にあったようである。彼等は祖父の地に城を構え、さらに近くの小豪族を従え、平時は農耕を、戦時には小豪族を率いて大豪族のもとに従った。彼等が組織している地域的な兵団は土地の名をとって何々衆といわれるようになった。

信玄は天文十三年伊那に侵入し伊那を手中に納めたのは天文二十一年以降である。天文末から天正十年（1582）高遠城の落城まで約三十余年間が武田極下の時代である。下伊那を平定したところの信玄は木曾氏をも降伏させ、北信に軍を進め、高梨・島津・村上等の北信の諸豪族を率いて上杉軍と川中島に戦ったのは弘治二年（1555）からであるが、勝敗はつかなかった。信玄がこうした作戦を展開している間に、伊那では一部の武士が武田に叛し、木曾氏を討つべく木曾に攻め入る。その果ては信玄のきびしい成敗を受けたという。このことは「甲陽軍鑑」に見へる。「伊那武蔵根元記」もこの説にあって、「上伊那郡史」もこの事件にふれている。真疑の程は別としてその概略にふれておく。

このことは、弘治二年（1556）七月、伊那溝口・松島・黒河内・上穂・小田切・伊那郡・宮田殿島等の諸氏が高举して木曾へ攻め込み、木曾氏と戦って帰ったのであるが、信玄は伊那に帰って大いに怒り、これ等の諸氏と孤島において磔殺したというのである。以上「上伊那誌」に依るが、小田切氏・宮田氏がその後どうなったか歴史上明かでない。

第Ⅱ章 調査の経過

第1節 調査に至るまで

宮田村のは場整備事業は、全村を対象に施行計画し、昭和44・45年の2カ年にわたり本村大久保地区53haを団体營で施工。昭和45年にたてられた宮田村総合開発計画は大久保地区を除いた531haの全面積を5カ年間で県営は場整備事業として実施することになった。昭和46年中越地区から着工、順調に工事はなされていたが、その後不況に見まわれ遅々として進まないまま5カ年は過ぎ現在43%の進捗率を示す状況である。宮田村は古くから開けた土地だけあって埋蔵文化財も多く分布している。は場整備も農業近代化のためにはどうしても行わなくてはなりません。しかし、埋蔵文化財は我々人類の祖先が残した貴重な歴史的財産である。この大切な財産を開発は破壊して行くのである。我々は歴史を愛し我々の世代に守り得なかったこの貴重な財産を、遺跡保存の最少の保護処置として発掘に依る記録保存の道を選んだのである。昭和47年田中北、古町、300m²の遺跡を調査した。昭和48年度は広垣外木戸口150m²遺跡調査。昭和49

年度は、広垣外第二次調査 600 m^2 昭和 50 年度姫宮 1000 m^2 。向山遺跡 500 m^2 の発掘。昭和 51 年度には、下の段 600 m^2 、五升蒔 600 m^2 、駒濱遺跡 180 m^2 の発掘調査を 51 年 4 月 17 日南信土地改良事務所長と契約を締結し、宮田村教育委員会が調査を行なった。

この事業の施行に当り南信土地改良事務所の御協力、県文化課の御指導、村当局の御援助、地元の皆さんの御支援を深く感謝するものであります。

太田次長

発掘調査団

団 長	友 野 良 一	日本考古学協会員
調査員	小 木 曾 清	宮田村教育委員
〃	丸 山 弥 生	上伊那考古学会員
〃	気 賀 沢 進	長野県考古学会員
〃	伊 藤 修	飯島市教育委員会
〃	赤 羽 義 洋	国学院大学生
〃	小 池 政 美	長野県考古学会員

調査事務局

事務局長	林 金 茂	宮田村教育長
次 長	太 田 照 夫	宮田村教育次長
	古 河 原 正 治	宮田村教育委員会
	吉 沢 ま さ 子	〃

発掘協力者名

春日松己	春日修一	大田利男	北沢武男	小林喜男
小田切英夫	春日 宗	木ノ下進	中島定治郎	小田切文字
向山まさ子	平沢八千子	宮木芳弥	白鳥あき子	平沢しげ之
保科義重	桃沢乙平	小林広子	平沢邦子	水野愛子
田中計主	芦部政市	市瀬玉枝		

第 2 節 発掘日誌

5 月 26 日 午前中発掘の諸準備、午後からグリッドの設定、グリッドの方位角 N E 19 度 6 分 20 秒、B.M.の標高 694.096 M、V ベル眼鏡高は 694.265 M、グリッドは東の畑より西側に A～Z⁵ までと、南段丘端を基点として北に向って 20 区画の杭打を完了。

5 月 27 日 N-4 グリッドに配石址を発見 Q-5 グリッドの平均地層は耕土 15～20 cm、地橋

層5～10cm, その下部は黄色ローム混り砂質層30～50cm, さらにその下部砂礫層である。

5月28日 N-4の配石を続いて調査を行なう。今日のところ配石の規模は確認されなかった。Q-5グリッドの黄色ローム混り砂質層は二次的の堆積であることが確認される。

小田切英夫氏の住宅の附近のロームは砂質を含まないローム層が発見されているので、Q-5グリッド辺は押手沢の扇状地端であるため、移動したロームかも知れない。K-2～K3グリッドより縄文早期末の土器片が発見される。附近のグリッドからは内耳が検出発見される。L-2グリッドより鉄鍔・中世陶器片が出土。本日はS-7グリッドまで調査が進む。

5月29日 J-3・4・5, Q-15, M-3, L-5, K-6～7グリッドに烈石を発見。この烈石は屋敷続きの畑と、その上の田の土手帯に段丘端の方向伸びていることがわかった。

5月30日 本日はO-15グリッドを中心として調査を行う。今迄調査が行われたグリッドの地層調査を行い記録。また、調査区域及びその附近の田・畑の基準標高記帳。

5月31日 N～Qの8から北側のグリッドを中心に調査が行われる。内耳, 中世陶器片が数多く発見される。中世豪族居館址として考えていた遺跡として、注目されるにいたる。

6月1日 K-8グリッドから本日作業は開始される。L-7～10, M-12, O-7～12, R-7～10, Q-7～10, R-7～10, N-10～12の各グリッドを調査。L-9グリッドから中世陶器, 内耳等が発見される。

6月2日 K-7～12, 7-12, M-7～11, N-7～14, O-13～14, P-13の各グリッドを調査, 本日発見され主な出土遺物は, 天目茶碗, 灰釉陶器, 鉄釉陶器等で, 遺物の出土層位は, 耕土, 地場, 黒褐色土層中からである。作業の打合せ会がのびのびになっているので, 作業が終わってから作業小屋で行う。本日の見学者, 南信土地改良事務所の担当職員と宮田村は場整備係職員3名。

6月3日 K-6～9, L-6～9, N-6～9の各グリッドの調査。出土した遺物は灰釉陶器, 内耳, 中世陶器, 鉄片, 青磁, 白磁, 天目茶碗, 縄文中期の土器片等数多くの土器片が出土した。

6月4日 L-6～9, M-9～15, N-6～11までの各グリッドの調査。本日も前日同様縄文式出土器, 内耳, 青磁, 中世陶器, 鉄鍔等が出土する。遺跡らしき落込をN-6・7, M-6・7に発見。一部ブルドーザーにて表上の除土を行う。

6月5日 本日は雨天のため作業は休み。排水が悪い箇所に排水ポンプを入れて排水を行う。西木戸の田は特に排水が悪い。

6月6日 雨天で作業中止。午前午後の2回排水ポンプの移動を行う。

6月7日 U-2～16, V-5～16, W-4～11までの各グリッドの調査, 遺物は, 灰釉陶器, 内耳, 中世陶器, 鉄片等が発見された。

6月7日 U-2～16, V-5～16, W-4～11までの各グリッドの調査, 遺物は, 灰釉陶器, 内耳, 中世陶器, 鉄片等が発見された。

6月8日 U-12～16, U-13～14, W-13～14の各グリッドの調査。これ等のグリッドからは縄文早期の押型文土器, 早期末の土器片が数多く発見された。

6月9日 本日は雨天のため作業は休み。作業小屋に水が入り排水を行う。本遺跡周辺は湿地帯であるので, 発掘は雨が降ると一, 二日は出来なくなる状況である。

6月10日 作業は休み

6月11日 作業は休み

6月12日 2³, II層黒褐色土中より天目茶碗の破片, Y-7, 開元通宝III層黒褐色土層中より出土。花粉分析のための採土, 信大農学部学生小林善美江さんに依頼, 採土方法は泥炭層を27層に類して採土する。2⁴ - 12 縄文早期末の土器が発見される。

6月13日 2⁶ - 9 縄文早期末の土器片縄文中期の土器が発見される。

6月14日 Y-12グリッドより, 鉄棒と思われるものが発見される。X-11, 鉄片, 鉄線が検出される。柱穴内より柱状の木炭が発見され, 火災にあった掘立柱の炭化物ではないか。

6月15日 遺跡の全体測量 U, V, W-14, 15グリッドの調査, 縄文早期末の遺構及び遺物が出土。

6月16日 遺跡の全体測量 U, V, W, Xの14グリッドの調査, 縄文早期末の遺構及び遺物の調査。

6月18日 水路の北側の田に泥炭層調査のため、幅1m長さ10m深さ2mのトレンチを掘り泥炭層の再調査、第2柱穴址の測量。

6月19日 第1号列石の測量、各グリッドの断面測量。

6月20日 第2号列石の平面測量を行う。断面2カ所測量。

6月21日 第2柱穴址の西側のグリッド調査 居館の地形測量。

6月22日 休み

6月23日 休み

6月24日 休み

6月25日 居館の地形測量、遺構の全体測量。

6月26日、F・G・Hの3グリッドに堀を発見。この堀を北側に拡大する。堀の幅は3~4m。

6月27日 昨日に引続いて堀の調査を進める。F・Gの10・11グリッドに花崗岩の直径2m余平盤石が発見され、その南と北に門柱穴を検出。地主の小田切英夫氏に聞くと。昔は西木戸と言っていたという。X・Y・Zの14グリッドの調査。

6月28日 前日に続いて堀を北に向って調査・堀の北終点は居館に引水した川で切られているので、それから北は明かではないが、おそらく10m ところで押手沢の支流に達するのではないかと。Z⁴・Z⁵の13~14グリッドの調査。

6月29日 堀の実測、全体の実測等を終了し5月26日より開始した下の段遺跡の調査は無事終了することができた。

第Ⅳ章 調査の結果

第1節 調査の概要

住居址	縄文中期	第1号住居址1軒
竪穴	縄文早中期	第1号・第2号・第3号・第5号・第6号・第8号 第1号・第2号は生活遺構として疑問である。第8号は整理中発見されたものである。
土城		第1号・第2号・第3号・第4号・第5号
列石		第1号・第2号 第1号列石は、居館の西木戸近くから天白神社の社殿前までのびていることを考えると、居館と関係あるのではないか。第2号列石は西柱穴址の手前で切れているところから、西柱穴が破壊したとすれば、西柱穴址より古い時期のものとしなくてはならない。現在のところ、よく中世居館に発見される敷石道路とすべきかどうか、結論づけられない。
配石	中世	最近伊那市東春近村岡南荒城の発掘で発見された配石、飯島町南羽場遺跡、岩間城址からもまったく同様な遺構が発見されているところより、本遺跡発見の配石と同様のものと今のところ考えている。
特殊遺構	室町	縦4.5×40m 楕円形周壁に柱穴をもつ遺構である。

第2節 縄文時代の遺構と遺物

第1号住居址

本址は、E-3グリッドにおいて堀の確認追究の際発見されたものである。堀の東側50cm程度の地点で、埋ガメに似た状態の土器が出土し、踏み締められた床面が検出した為、第1号住居址と命名した。しかし、残存状態が悪くプランの全貌を確認することはできなかった。

遺物

いわゆる縄文中期初頭の土器が出土している。半截竹管によると思われる平行沈線文が施文される土器、縄文施文の土器などが出土している。前者には、内外面ともに器面調整の丁寧なものと、そうでないものがあり、丁寧なものには砂粒のほか雲母の粉末が胎土に含まれている。丁寧でないものには、沈線の引き方も粗雑であるようだ。この沈線文の施文される土器の文様モチーフは、従来言われてきている、いわゆる平出第Ⅱ類Aに類似するものである。尚、住居址は堀によって大半を壊されており、遺物の出土量も多くはなかった。

第2号住居址

L-11, 12グリッドに焼けた面とカマド状の遺構が検出され、その南側のローム面が比較的

堅く、平らであったことから、後世に削平された住居址と判断されるものである。柱穴などは不明である。カマドの付近を中心に、その底部片には糸切痕が見られることなどから考えて、平安時代の住居址であると思われる。

1. 早期の遺構と遺物

発掘区の北端にまともって検出された竪穴状の遺構は、遺物とその出土状態から考えて、時的には早期末としてよいものである。また、M-12グリッドでは、ピット内より田戸下層式土器の底部破片が出土しており、付近押型文土器の出土とともに、その時期の遺構である可能性がある。ここでは、押型文系土器と、沈線文系土器としての田戸下層式土器、条痕文系土器として把握される土器群と、それとはほぼ時期を同じくすると思われる条痕の施されない土器との、大きくふたつに分けて記述することとする。

(1) 第Ⅰ群土器とその遺構

押型文土器及び田戸下層式土器を一括する。

第1類 押型文土器。全部で9片出土し、W-Zの11~14のいくつかのグリッドから、8片と、残り1片がN-10グリッドから出土している。その分布は、N-10グリッド出土のものを除いて集中する傾向があるが、生活上の遺構は何ら見出せなかった。2点の楕円文を除くと全て山形文であり、楕円文に類するものがある。胎土には長石・石英粒が多く含まれるが、繊維の含有はない。また、黒鉛を含んだものも見当たらない。

第2類 田戸下層式の底部破片で、4本の沈線が横にめぐっている。胎土には細かな蟹母の粉末が含まれるが、長石・石英粒の混入はなく、胎土は緻密で焼成はよい。内面は炭仕物の付着が著しい。M-12グリッド内の1ピット中より出土した。このピット内にはいくつかの隙があったが、火熱を受けた痕跡はない。

(2) 第Ⅱ群土器とその遺構

粕畑式・上ノ山式・入海式・天神山式、及び茅山式と、これらとはほぼ時期を同じくすると考えられるその他の土器を一括した。これらの土器は遺跡北端の各グリッドより集中的に出土し、第3・5・6・8号の各竪穴が検出された。第1・2・4・7号の各竪穴は、規模・形態及び遺物との出土状態から早期の生活とは考え難いものである。竪穴は径1~2mの平面楕円形のものや、円形のものがあり、深さは ㎝内外である。尚、第8号は、発掘時に出水と泥によってその検出が難しかったものであるが、遺物のマッピングを行なう過程でその存在が知られたものである。一方、土器は主として竪穴内より検出しているが、その分布は遺跡全体では大きく3つに分かれており、その内の遺跡西北端の部分では更に3群に分けられるようである。このようにいくつかの分布域があるものの、その内部における土器組成は殆ど異なるようである。

第1類 粕畑式土器。胎土中に繊維を含み、厚さ5~7mm前後で、刺突による爪形文

が内外面にめぐっている。条痕は貝殻によると思われるが、内外面ともあまり目立たない。口唇上に刻目の施されるものがあり、台状口縁も見られる。

第2類 上ノ山式土器。繊維を多く含有するものと、殆ど繊維を含まず、長石・石英などの砂粒を多量に含んだものがある。前者にはやや細目の条痕が施されるが、後者には条痕は見当たらない。口辺部付近に2帯前後の凸帯がめぐり、その上に押捺が加えられている。一方、内面の条痕は更にその上に仕上げを施してある可能性がある。尚、口唇上にも凸帯と同様の押捺或いは刺突が加えられているようである。しかし、この上ノ山式と次の入海Ⅰ式とはその文様がよく似ており、繊維を含まず、条痕見当たらないものは或いは入海Ⅰ式と考えてもよいかもしれない。

第3類 入海式土器。粘土、上ノ山式土器にくらべ4～5^m/mとかなり薄手になり、繊維はその薄い器壁の中に薄くサンドイッチ状に含まれる。表面からの観察は小破片では難しく、断面にその混入の状態が観察できる。上唇上及口辺部に刺突による爪形文帯がめぐっている。そのモチーフは、3帯前後が平行して横走するものと、1帯が波状を呈してめぐっているものがある。この施文部分は、条痕が施されていて磨り削されたものか、もともと条痕は施されなかったものかはっきりしないが、胴下半部では浅い条痕が施されている。2類と同様、深い鉢形が大部分であろう。尚、この入海式は、凸帯文がない爪形文があるという点では、より入海Ⅱ式に近似するもので、波状をなす爪形文帯は石山式へと引きつがれる文様要素と思われる。底い凸帯上に爪形の施された土器は1片も見られない。

第4類 天神山式土器。厚さ4^m/mと薄手作りで、繊維が上述のような土器と異って、「短く刻まれたワラ」の如きものが極く少量含まれているにすぎない。器表から観察できるものが多い。口縁は小さな波状を程するようであり、口辺部に貝殻(或いは櫛状の工具か?)による波状文が施されている。口唇上にその腹縁による刺突は見当たらない。

第5類 繊維の混入の状態、胎土、焼成とも第4類によく類似するもので、整形も、内面或いは外面を磨いたものもある。殆どが文様を施していない。また、口縁部破片が極めて少ないことから、第4類の胴部破片と考えられるものが含まれている可能性もある。しかし、この第5類は極めて特徴ある土器で、器形は小破片のためうかがいが知れないが、前述の類似点より、天神山式と同時期かそれ以前と考えられ、まとまった一群をなすものと思われる。

第6類 絡条体圧痕文の施文された土器である。繊維を多量に含み、厚さ8～10^m/mと厚い。繊維を含んで焼かれたためか、非常にろくなっている。内外面とも条痕は見当たらないが、内外の器面の色調には斉一性があり、どの破片も褐色を帯びた灰白色を呈している。口縁部下5cm程のところに、断面「カマボコ」状の凸帯が1本めぐっており、その凸帯上とその上下に絡条体による圧痕文が施されている。多量の繊維含有のため不鮮明である。器形は口縁部で外に若干開く深鉢形をなすものと思われる。

第7類 厚手で繊維も多く含み、条痕或いは縄文を施してある土器を一括した。殆どが茅山式土器の範疇に属するものと考えられるが、茅山式土器には条痕以外に縄文の施文されたものも含まれている。条痕にはいくつかのパラエティがあるが、その底部には出土している

破片より尖底をなしているものと考えられる。条痕施文の土器には、いわゆる「装飾的な土器」は見当たらない。条痕のみ施文のものが殆どである。また、羽状縄文は見当たらない。一方、器面調整時の磨り消しによる「研磨」は条痕施文のものに認められるようである。この第7類土器は底部の状態や器形上段やくびれがないこと、それに一面に条痕が施文されることなどから、茅山式でも比較的新しい様相をもつものと考えられる。

第8類「中厚手」で繊維を含まず、口縁部がやや開く比較的小形の深鉢形土器である。口縁から底部に至るまで単節の縄文が施されており、内面には炭化物の付着が著しい。繊維を含まない点から、中期初頭かとも思われたが、竪穴内より前述してきた早期の第1群土器と伴出しており、ここでは一応早期末と編年の位置を与えておきたい。前述第5類・第6類とともに今後検討を要する土器である。

(3) 石器について

土器については時期的に大きく第1群、第2群に分けて述べたが、早期の石器と考えられるものは、石鏃・ドリル・石匙・サイドスクレイパーなどが出土した。石鏃・ドリルは各1点のみであるが、石匙・スクレイパーはいくつか出土した。サイドスクレイパーとしたものは、横形石匙へと変化する前のものとも考えられる。

第3節 中世 — 近世の遺構と遺物

1. , 古くより、小田切城と伝えられていたが、それは伝説の城を出なかったのである。昭和47年伊那毎日新聞社が、「伊那の古城」として発刊された篠田徳登著に、小田切城も堀は埋められ、土塁はこわされて今わずかに地名が残っているのみと書かれている。小田切氏の祖五郎良満は、大田切の菅野氏を攻める時、一条忠頼の下にあり、その功により小田切の地(地名)をたまり居住したのが始まりだという。今回の発掘で篠田徳登先生の言われている、堀が埋められたと言うのは見事的中した。また、土塁の一部が北側に28m残っている。

2. 土塁、前述の土塁は現在小田切英夫氏の住宅の北西の位置に延長28m

下幅3m、上幅1m、高さ1mの土塁が残っている。まず、この残存土塁を基礎として復原を試みると、東北には明治末年頃製糸の工場を建てるため土塁を取り去った。東の方は古くは高さ0.8m程の古ぼけた石垣があったが、新しく木戸を付ける折採土して新しい石垣を2~3m西に移動して作った。現在の石垣はそれである。土塁はこの石垣附近に設けられていたものと考えられる。南側は、小田切川の左岸段丘にめぐらされていたものであろう。西側は内堀の外側か内側か明かでないが、もし、外郭にも土塁が築かれていたとすると、内堀に面していた土塁は東側に設けられていたのが妥当と思われる。外郭の土塁についてはまったく残存部分が認められないので、その存否を知ることができた。中正の柱穴址や出土遺物からして、中世豪族の従属している人々の住や作業場が考えられる。



3. 堀、発見された内堀は、全測図にある位置に発見された。堀の南は小田切川左岸段丘を掘抜

いて作られている、幅4m高さ2m余り下部は葉研掘である。堀は北の方向に向って作られ、南端より18mの位置に、直径2.2×1.75m上面平盤の自然石が表土下15cmに発見、さらに石の周囲を掘ってみると南北対象の位置に直径40cm深さ50cmの門柱穴を発見。門柱穴は伊那市西春近小出村岡南(荒城)の外堀に発見されている。小田切英夫氏は、昔はこのあたり西木戸と言っていたと語ってくれた。正しく木戸である。堀はこの木戸辺では深さ1m内外を測る深さとなっている。木戸より北側は幅2.25m、高さ50cmと浅い。堀の北端は井筋で切断されている形となり形状は不明であるが、おそらく、北を流れている押手沢の支流、自然の堀に合流していると思われる。

外郭の掘りは、北側の押手沢支流の自然的掘形を利用しての掘形と見受けられる。

4. 用水、現在小田切英夫氏の北を流れている水路は水田の引用水用であるが、古くは居館への用水であったと考えられる。
5. 主郭の面積、東西88m、南北37m、面積2732m²を測る。
6. 外郭の面積、東西62m、南北36m、面積2240m²、主郭よりやや小規模である。

堀

鎌倉時代の灰砂、室町時代の天目茶碗、同常滑焼の大甕、桃山時代～江戸時代の鉄胎筒茶碗、摺鉢の破片など、中世以降の各期にわたる遺物が出土している。

第4節 中世と近世の遺構と遺物

第1号土坑

本遺構は、M-11グリッドに位置し、東側柱穴址の中にある。1×1.3mの楕円形プランを呈し、35cmの深さを測る。柱穴址と同様黄色砂質層に掘り込んだものであるが、底部は堅く踏み締められたローム面であった。南壁には18cmの深さを持つ50×25cmの小ピットが掘られている。内部から所属時期不明の土器1片が出土しているが、遺構の年代決定とはなり得ない。

第2号土坑

本遺構も、東柱穴址中にあり、第1号土坑の南西に位置する。2.2×1mの長楕円形を呈し、30cmの深さを測る。南側上面には70数cmの花崗岩石が、北側底部には長さ70cmの石が横たわっていた。第一号土坑と同様、その底部は堅く踏み固められていた。

遺物

内部から遺物は出土しておらず、付近から陶器・内耳土器・早期の土器などが出土しているものの、遺構の年代決定は難しい。

第3号土坑

本遺構も、東柱穴址の中にあつて、第1号土坑の東側に位置し、径90cmの円形プランである。深さは62cmを測り、深い。その南壁には25cm、深さ15cmの小ピットが検出されている。

遺物

付近から陶器、内耳土器などが出土している。内部からの出土はない。

第4号土坑

2号列石址に西接し、Z²-3グリッドに位置する。北西部が僅かに張り出した2×1.8mの方形形状を呈している。底部は西側に傾斜しており、西壁では130cm、東壁では95cmの深さを測る。北側底部に70cmの長さの河原石が検出されている。破壊状況も見受けられないことから本遺構は、2号列石址に関連するものか、あるいはそれ以降に施されたものと思われる。

遺物

内部に若干落込で内耳土器が一片出土している。

第5号土坑

2号列石址の西側、Z²-4グリッドで検出された。1.2×1.3mの三角形形状を呈し、その南側に於いては、ピットとの切合い関係にある。深さは40cmを測る。底部中央に長さ50cmの河原石が横たわっているほか土坑内には、10個の石が検出されている。

土坑内部から、時期不明の縄文土器1片が検出されたが、付近には陶器片が若干分布する。

1号列石址

本址は、西側の特殊遺構と接して検出された。本来は、北側は西木戸付近、南側は天伯神社あたりまで伸びていたと思われるが、耕土下20cm前後と残存状態も悪く、調査では、13m程検出されたのみである。拳大から人頭大の三百数十個の自然礫が幅50～70cmの範囲に及び、一部には積石状態も見受けられるが、そのほとんどは集石風となっており、並べ方には、規則性はみられない。特殊遺構と接し、配石址とも近接していることから、これらの遺構と関連する道路址とも考えられるが、調査上では、それを確認することはできなかった。

遺物

遺物は殆ど出土しておらず、遺構の機能していた時期ははっきりしない。遺構の形態的な特徴などから、中世以降に構築使用されていたものと考えられる。

2号列石址

本址は、Z²・Z²-3・4・5・6グリッドにまたがって検出された。北東方向に全長16.5mが確認されたが、実際には更に南北に伸びていたものと思われる。列石の幅は3～3.5m、第4号土坑の付近では2m程となっている。1.2×1mという大形の石もあるが、40～50cmのものも多く、その間に拳大小石が埋め込まれていた。1号列石址に比べると、大形の石が使用されている。無規則配列ながらも、上面はほぼ同レベルに保たれ、石畳を思わせる。粘土などによる施法も見られず、立石もなく、一部のみ積石が見受けられた。

遺物

列石間より、江戸時代の白磁の茶碗、それに灰釉陶器の破片及び、内耳土器2点、鉄片1片が出土している。黒曜石、チャートのフレイクも若干出土しているが、本址とは直接関係しないであろう。

配石址

本址は、特殊遺構の南、1号列石址の西側に位置する。N-4グリッドを中心に7×4.7mに渡って配石されている。比較的大形の石が使用されており、全長50cm以上のものが40数個に及

ぶ。磨滅した花崗岩が多い中で、上面に向けての割石が数個検出されている。配石は、南に傾斜した砂質ローム面を水平に整えた後行われたものと思われ、北側一部からは焼土が検出された。粘土などの伴出はなかった。本址は、特殊遺構、1号列石との関連も推定されるが、性格の決定的資料は得られなかった。本址の類似例としては、西春近村岡南遺跡の三例、飯島町岩間城遺跡などがあげられる。

遺物

内耳土器のみ3点ほど出土している。列石と同様、遺物の、出土量が少なく、そのこと自体がこの遺構の性格を決めることにもなるかと思われる。恐らく中世以降のものであろう。

特殊遺構

1号列石址と東接し、K・L・M—6.7グリッドにかかって検出された。砂質ローム層を基盤とした、4.5×4mの円形プランを呈する。壁内施設としては、中央部に70×90cmの楕円形のピット、壁付近を巡る15ピット、南東部からは径10cm前後の小穴が29個検出されている。小穴集中付近からは焼土も伴出しているが、どのような性格の施設かは、わからない。床面からは内耳・鉄製品等が出土し、本址は中世遺構と思われるが、その形状が楕円形を呈するという事は、どういうことであろうか。

遺物

室町時代及び江戸時代の陶器片が出土している。内耳土器・鉄製品などととも床面様の堅緻な面からの出土である。量的には室町時代の陶片が多いことから、およそその時期に構築されたものと考えてよいであろう。

東柱穴址

L～P・7～15グリッド、14m×10mの範囲で検出された40数個の柱穴群をいう。配列は東西1.7～8m、南北2.7～8m間隔に数ピットを、みるのみである。数回の修復・建て替え作業が行われたと思われる。遺物も鎌倉時代～江戸時代にわたる各種の陶磁器が出土している。室町始代のものが最も量的に多く、次いで江戸時代・桃山時代・鎌倉時代の順となっている。鎌倉時代のもは、獵技家も含め、瀬戸産の灰釉陶器が多く、室町時代のもは、若干の中国青磁・常滑焼と、多くの天目茶碗によって占められている。桃山時代は、鉄釉・灰釉などが、江戸時代には、鉄釉・その他の瀬戸産の陶磁器が多い。用途別では各時代を通じて茶碗類が多いが、摺鉢なども目立つ。室町時代の仏花瓶も何点か出土している。

一方、鉄製品はN—12・13・O—13・P—13の各グリッドに多く分布しており、鉄鏃、性格不明の利器、釘などである。尚、大形の木炭がピット内より出土することや、焼土・炭などが集中的に検出されていることを考えれば、火災・或いは鍛冶場の存在を予想させる。

西柱穴址

V～Y・6～12グリッドにかかる100余個の柱穴群をいう。南北に数個1.7～8m間隔のピットのほかに、規則性はみられない。

陶磁器の出土量は、東柱穴群よりはるかに少ない。内耳土器が全体的に出土しているが、これも東柱穴群にくらべると極めて少量である。

鎌倉時代の灰釉陶器が東寄りで一片出土しているほかは、室町時代・桃山時代・江戸時代の遺物が多い。室町・桃山時代のものが主流を占めるが、室町時代の遺物は比較的南側にその分布が偏るようである。

これらの点より、ここに築かれた建物は、鎌倉時代に創建されたとは考え難く、室町時代に建てられ、桃山・或いは江戸時代にまでわたって使用されたと考えられる。

第 V 章 調査のまとめ

第 1 節 早期の土器

早期の土器は第 I 群押型文土器・田戸下層式土器と第 II 群いわゆる条痕文系土器とである。ここでは量的にも多く、かつ問題の多い後者についていくつかの問題を指摘しておきたい。

今回出土した土器は、量的には第 II 群が圧倒的に多く、その中でも第 2・3・5・7 類が多く出土している。中でも第 5 類・第 6 類・第 7 類・第 8 類の各土器が問題の多い土器である。

第 7 類土器は前述のように、アナダラ属の貝殻による条痕の施されたものが多く、縄文施文、縹系文施文のものなどが含まれる。従来、茅山式土器には、条痕施文の土器の多い遺跡では茅山上層式に編年されてきた。或いは茅山上層式以後として扱われている場合もある。埼玉県舟山遺跡(註 1)、同内畑遺跡(註 2)、同針ヶ谷北通遺跡(註 3)などである。また、東京都下耕地遺跡(註 4)では野島式・鶴ヶ島台式とはっきり認定できるものが伴出したため、それと同時期のものとしており、茨城県狭間貝塚の報告文では西村正衛氏によって、条痕施文の土器は層位的事実に基き、鶴ヶ島台式の一部をなすものであるとされ、条痕施文の土器と意匠文のある土器が、粗製・精製土器という考え方で理解されている。(註 5)

一方、岡本勇氏によって、「茅山上層式の忘れてはならない一つの特徴は、その大半がたんなる条痕のみの土器である」と茅山上層式土器の特徴が強調されており(註 6)、前述の埼玉県舟山遺跡・内畑遺跡・針ヶ谷北通遺跡はこの見解を継承しているものと思われる。(註 7)しかし、西村氏による結果も事実であり、いわゆる条痕文系土器群は野島式期より少なくとも二者が存在していた可能性がある。

縄文施文の土器については、岡本氏によって、「縄文は、両者にみとめられるが、茅山下層式には僅少であり、茅山上層式にはかなり多い」(註 8)とされて以後、最近、静岡県元野遺跡の「縄文は……むしろここでは茅山下層式土器に含まれるものとしてとらえたい」とする報告がなされた。(註 9)しかし、後者は縄文が茅山下層式の特徴である刺突文・凹線文といっしょに同一個体中の施文される場合である。

以上のような点から、下の段遺跡第 7 類土器をみた場合、茅山下層式と茅山上層式の何れにも決定し難いが、器形的に、口辺下部に段を有したり、隆起線のあるものがなく、また、底部の形状が尖底のもののみ出土していること、更に、条痕以外に鶴ヶ島台式類似の文様をもつ土器が出

土していないことは勿論、茅山下層式と茅山上層式の間でその編年的位置が与えられるハツ崎貝塚第1類土器(註10)、或いは元野遺跡B類土器(註11)、に見られる刺突文のある土器が下の段では見当たらない事などから、この第7類土器はより茅山上層式に近似の一群として理解できるものと思われる。しかしながら、埼玉県舟山遺跡で指摘されたと同様に、前述のように底部の形状や、文様施文に、吉井城山第1貝塚下部貝層出土の茅山上層式土器とは大きな異いがあり、今後の検討を要するものである。

さて、結条体圧痕文の施文された第6類であるが、結条体圧痕文については古く、神奈川県子母口貝塚、同大町坂貝塚の資料に基づいて、山内清男によって子母口式土器に施文されるとされ(註12)で以後、一般に子母口式のメルクマールと考えられるようになり、最近のものでは、東京都多摩ニュータウン№269遺跡で安孫子昭二氏による子母口式土器の細分がある。(註13)しかし、安孫子氏が子母口式としたもので、隆帯上に結条体圧痕文を施す土器は、近年長野県で岡谷市海戸・丸山遺跡(註14)、伊那市百駄刈遺跡(註15)、和田村男女倉遺跡C₂地点(註16)などで報告されており、海戸・丸山遺跡のものは戸沢充則氏によって円筒下層式に関連づけられ、男女倉遺跡では、「結条体圧痕文をもって子母口式に比定することは、疑問視されつつある」とし、この土器を茅山下層式に関連させている。

一方、千葉県城の台塚(註17)では、吉田格氏によって先の山内清男による子母口式とは大きく相違した土器が子母口式土器として報告されているが、先行する戸上層式土器からの移行もスムーズである。結条体圧痕文のある土器は1片も出土していないことが指摘されている。山内の指摘した子母口式土器に関しては、現在のところ、「結条体圧痕文をメルクマールとする子母口式土器は関東地方における客体的土器群」であるとする見解(註18)もあるが、静岡県県の資料なども含めて、その編年的位置からまず再検討する時期にきていると考えられる。

以上の諸点と、下の段遺跡における早期の土器の出土状態、先の第7類土器の検討と考え合わせれば、第6類は茅山上層式土器と伴出していることとなる。戸沢氏による円筒下層式土器と関連あるとする見解は現在の編年上や問題があるとしても、男女倉遺跡の見解に近い結果と言えよう。

以上、第6・第7類土器の含んでいる問題の一部を述べてきたが、第5・第8類については後日記述の予定である。

註 1. 谷井彪ほか「舟山遺跡展」鳳翔2号 1966

註 2. 谷井彪「内畑第一群土器について」埼玉考古 1971

註 3. 土肥孝ほか「針ヶ谷北遺跡発掘調査報告書」埼玉県遺跡調査会 1975

註 4. 岡田淳子ほか「春日台・下耕地遺跡」八王子市春日台遺跡調査会 1974

註 5. 西村正衛「茨城県潮来町狭間貝塚」早稲田大学学術研究第22号 1973

註 6. 岡本勇「横須賀市吉井城山第一貝塚の土器(一)―茅山上層式土器とその周辺―」
横須賀市博物館研究報告第7号 1962

註 7. 隣接する長野県駒ヶ根市舟山遺跡の報告でも、条痕施文の第4類Dを同様に扱っている。

- 註 8. 註6に同じ
- 註 9. 瀬川裕一郎・関野哲夫 「元野遺跡発掘調査報告書」 沼津市教育委員会 1975
- 註 10. 大参義一 「ハツ崎の具塚」 刈谷市教育委員会 1961
- 註 11. 註9に同じ
- 註 12. 山内清男編 「日本先史土器図譜」 1939～1941 (山内清男先史考古学論文集 第6～10冊 1976)
- 註 13. 安孫子昭二 「縄文早期後半の土器」 多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅳ 1968
- 註 14. 戸沢充則 「原始・古代の岡谷」 岡谷市史 上巻 1973
- 註 15. 中央道遺跡調査団 「百駄刈遺跡」 長野県中央道発掘調査報告書 伊那市～西春近— 1973
- 註 16. 笹沢浩ほか「男女倉遺跡C地点」 男女宮 長野県史 1975
- 註 17. 吉田格 「千葉県城ノ台具塚」 石器時代1号 1955
- 註 18. 熊谷常正 「東北地方縄文時代早期後半の様相 — 一条文系土器群の系譜 —」 透光器8号 1974

第2節 館址について


序 説

従来日本の城郭の研究史は、安土時代以降所謂、近世の城郭にあまりにも大きな比重がかかり、その研究成果はわれわれの介入する余地のない迄にいたっているのである。それに比して建築遺構を止どめない中世城郭の研究は遅滞として進まないのが現状である。最近我国も農業近代化事業として大形のは場整備事業が各地で実施されるに及び、名もない居館址や、小城郭は事なげに破壊されて行く現状である。また、各地に大形道路、住宅団地、工場敷地造成等で、ますます破壊に拍車がかかっている。こうした現状を救うのは、その地におられる郷土史家の文化財を保護しようとする情熱より、ほかはないのであろう。

現在のところ、土塁、空堀、水壕それと地形しか残っていないところの、中世城郭の研究は全般的に見て、後進的研究段階にあると云わなくてはならない。

扱て、日本城郭史において、中世城郭と云われるものの存立期間は、平安末期から織豊時代の初期とされているのが一般である。また、これを歴史的事実と照し合せてみると、承平・天慶の両乱に始まり、鎌倉・室町の両幕府の興亡と戦国期の動乱を経て織田信長安土城の完成の初期まで約6世紀の間、それはまた、古代末期の地方荘園を生活基盤としていた勃興した、士族武士層が領国大名にのし上っていくところの過程でもあった。中世城郭とは、そのような各時代の歴史的条件に対応し、彼等の生活と自衛の場として、隸属下位層の努力をかりて、建設した遺構の凡てを意味しているものである。これともうすこし具体的に述べてみると、館、館城、根子屋式山城、戦国丘陵城郭、戦国平城、地域城、寺内城などのいくつかの型式が中世城郭なる名称のうちにあるものである。これらの諸型式は、それらを産み出したところの各時代の歴史的特質や領主

権の性格など有機的関係を持つはずである。そうした研究を進めることは、それらを可視的に示ることができるものと思われる。そうした目的を果すためには、方法的の出発がなされなければならない。城郭研究の基礎的仕事、それは遺構の羅張の構成の実測に基づく正確な把握とその復元からなくてはならない。私は、これ等の目的を果すために城郭の正確な実測図の作成を基本とし研究を進めている。私がここ2～3年間のあいだに調査した、城館址の記録をここにあげ比較検討すべきであるが、紙面の都合もあるので残念ながら別の機会にゆずることにする。

- A. 小田切氏の館（仮称）を聊か詳細に窺ってみると、まず、館の地点は丘陵半島状台地に位置する館である。
- B. 城壁、堀、空堀などに囲まれた部郭。小田切館址（仮称）は防禦を目的としての館址とは思えない貧弱な郭である。このことは、初期的な構造を意味しているのではないか。本館は長方形グランドプランを持つ館址と云うべきである。
- C. 次に館址の諸部分をうかがうと、a. 土塁は一重であったと考えられる。  の中世城郭防禦線分類で(2)に該当する土塁型式を示している。この種の土塁は足利館址の四圍をめぐる土塁に類似している。その他、関東の江ヶ崎城址、内青島城址などの中核部を囲む遺構をはじめとし、飯島町本郷南羽場遺跡、飯島氏の館址（仮称）、伊那市西春近南丘、同村岡北、村岡南（荒城）、宮田村中越氏館址に見受けられる。中世前期の城郭に最も多く用いられている型式である。
- D. 土塁道、本居館の土塁には土塁上に道があったように思われる。
- E. 腰郭や帯郭等は有り得た形式はない。
- F. 門口、西木戸なる名称が言伝えられていたのが今回の調査で明かとなった。西木戸の存在に対して、表木戸式は門がどこかに所在したと思われるが、現在のところ明かにするまでに至っていない。
- G. 守護神。現在のところ神社は存在しないが、北西の土塁の上に稻荷神社が祀られていたと言う。

城郭に稻荷と祭神としてあるが伊那地方には多い。

- H. 小田切氏館（仮称）の存続性、本館址の設置については、前述のとおり空堀土塁の項で述べたとおり鎌倉期と考えられる。文献上に於いても認められることである。しかし、その後南北朝に渡来したと考えられる中国青磁及び中世の陶器の発見をみているところ、この期に於ける存在性を認めなくてはならない状態であるが、これに対処される遺構は明かにするに至らなかったのである。

次に室町時代であるが、柱穴址、配石址等の遺構と考えられる施設が確認された。またその裏村になる室町時代の陶器は全体の41%に達している点は、何より有力な資料と言わなければならない。外郭の作られたものに或いはこの期であったかも知れない。

- I. 桃山期の遺構と思われる遺構は確認できなかったが、陶器類は発見されている。発見範囲は東西柱穴群にわたって堀がっているのは、外郭全体を使用する範囲の権力を保持していたことを物語るものである。

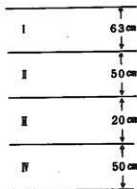
- J. 本居館の文献上の最終は、弘治元年（1555）から長期にわたる川中島の合戦間に、伊那の武士が武田に属し木曾氏を討つべく木曾に攻め入り、その果は信玄のきびしい成敗を受ける。伊那の八人衆、伊那の（溝口・松島・黒河内・上徳・小田切・伊那部・宮田・飯島の諸氏）他に信用すべき史書には、この事件は出ていない。それ以後宮田氏・中越氏の名は史書に出て来なくなる。
- K. 小田切氏は、信玄が親族の者を小田切氏の養子としていると云う言い伝えもあるが真疑の程は明らかでない。
- L. 江戸時代の遺構と考えられるものは明らかでないが、出土する陶磁器からおして江戸時代にも引続き居住しているように思われる。これは史料とやや異なる点もあり、一つの問題となることであろう。
- M. 小田切氏略系図
 小田切五郎良満 —（小田切氏の祖）— 良重入道石全（嘉吉年間）室町時代 — … 帯刀正勝 — 伊那の八人衆の一人 — その子正景は浪人となる。

花粉分析

下の段遺跡は、縄文早期から中期、中世、近世初頭に至る遺跡である。泥炭層の上層から縄文中期末の土器片が発見されている。採土した層は中期の土器より下層部にいたっているので縄文早期につながる花粉が得られる可能性も十分ある。また、過去に堆積した遺体から、遺跡のみではなく周辺の植物環境の歴史を明かにすることができ、原始社会の人々の生活動向を知る上にも重要な研究と考えるものである。今回は中間の経過報告であることも断わりしておきたい。なお、花粉の同定に際しては、理学部の酒井先生の助言をいただいた。

1. 泥炭試料の採取

I層上部は赤土、下部はれきが混じっていた。II層が、黒褐色の泥炭で、ここより試料を採取した。III層は、青色粘土と黒色の混じった地層、IV層はれき層、それより下部は、洪積土であった。試料はII層より2cm毎に27サンプルを採取した。



2. 花粉分析の方法

花粉分析とは、堆積物中から花粉や胞子をとり出し、過去の植物の種の同定や量を調べるための一手法である。原則として、

試料採取 → 機械的処理 → 化学的処理 → 分離 → 封入
 → 観察鑑定 → 考察 → 結論という段階をふむ。

筆名は、KOH—アセトリス法にHF処理を取り入れて分析する方法を使った。処理の大略は、次のとおりである。

試料 → KOH → 篩分 (80 × ッシュ) → 水洗 → KOH (10% 5分加熱) → HF →
アセトリシス液 (H₂SO₄ 1 : CH₃COOH 9) → 封入

3. 結果 (途中報告)

花粉分析のねらいの1つは、環境の変化、とくに気候の変化を推測することであるが、これを最もよく反映するのは高木類である。

今回分析を行った試料は、各試料とも、花粉より孢子粒の方が多く出現し、なかでも高木類は、きわめて少なく、草木類の花粉が多かった。そのため、これらの試料より、過去の植生、気候を推定することは、むずかしいと思われる。今回は、主な出現花粉の概略を述べることにとどめておく。

最も多い花粉は、OUPRESSAE (ヒノキ科) であり、続いて、*Abies* (モミ属)、*Picea* (トウヒ属) などが出現する。草本類は、COM—POSITAE (キク科) の *chichoriodeae* (タンポポ科)、*Carduoideae* (キク亜科) が多く、その他、LIFERAE (セリ科) や GRAMINEAE (イネ科) などが出現する。

信大農学部 小林喜美江

第1表 出土陶器一覽表

番号	時代(製作年代)	産地	名称	器種	部位	出土場所	個体	台帳番号
1	鎌倉	湘	反軸	平瓶		O-8		1370
2	"	"	"	"		N-11		1650
3	"	"	"	"	口縁部	M-12		1652
4	平戸系~鎌倉	遠	"	"	底	L-15		1738
5	鎌倉	"	"	蓋		N-13		1746
6	"	湘	"	"		M-13		1798
7	室町	"	"	撥鉢	口縁部	L-9		1319
8	"	"	"	"		N-12		1322
9	"	"	"	"		L-9		1324
10	"	"	"	茶碗		"		1329
11	"	"	"	"		K-10		1336
12	"	"	"	早茶碗		L-12		1346
13	"	"	"	"		L-14		1348
14	"	"	"	撥鉢		K-10		1359
15	"	"	"	"		O-14		1367
16	"	"	"	茶碗		O-13		1373
17	"	湘	"	早茶碗		N-14		1375
18	"	"	"	茶碗		L-12		1377
19	"	"	"	撥鉢		L-10	1381	1380
20	"	"	天目	茶碗		M-9?		1383
21	"	"	"	"		L-15		1385
22	"	"	"	"		N-10		1392
23	"	東	東	蓋		"		1402
24	"	湘	天目	茶碗		L-14		1404
25	"	"	"	瓢箪		M-13		1405
26	"	"	天目	"		"		1414
27	"	"	"	"		"	1409	1415
28	"	"	"	仏瓦版		M-9		1424
29	"	"	天目	茶碗		P-13		1482
30	"	"	"	"		M-12		1648
31	"	"	反軸	"		N-11		1651
32	"	"	"	印子皿	底	O-12		1657
33	"	湘	飯鉢	"		N-12		1663
34	(-)	東	飯鉢	"		"		1666
35	"	湘	飯鉢	印子皿	底	N-13		1743
36	(:)	"	飯鉢	"		L-13		1814
37	"	湘	反軸	"		"		1815
38	"	"	"	"		"		1817
39	鉢	湘	"	撥鉢		L-12		1332
40	"	"	天目	茶碗		L-10		1352
41	"	"	飯鉢	"		L-9		1360
42	"	"	"	撥鉢		"		1361
43	"	"	"	"		N-12		1362
44	"	"	反軸	皿		O-14		1368
45	"	"	"	甕茶碗		M-13		1413
46	"	"	"	"		L-11		1448
47	"	"	天目	茶碗		N-15		1458
48	"	"	"	"		M-13		1462
49	"	"	飯鉢	皿		L-14		1495
50	"	"	"	"		"		1496
51	"	"	反軸	"	口縁部	N-12		1653
52	湘(山~江戸初)	"	"	撥鉢		M-13		1399
53	湘(山~江戸)	伊豆	伊豆	蓋		"		1400
54	"	湘	"	甕茶碗	口縁部	L-12		1425
55	江戸初	"	"	撥鉢		L-9		1353
56	"	"	"	"	口縁部	L-10		1354
57	"	"	"	"		L-9		1355
58	"	"	"	"		L-12		1403
59	"	"	"	"		O-14		1487
60	"	"	飯鉢	"		N-13		1745
61	江戸中	"	"	蓋		M-10		1345
62	"	"	飯鉢	"		M-14		1249
63	"	"	甕茶碗	瓢箪		"		1250
64	"	"	飯鉢	"		L-9		1366
65	"	"	反軸	瓢箪		M-13		1408

番号	時代(製作年代)	技法	木	器	部位	径	厚	分
66	江戸中	瀬戸	飯粒			L-12		14.19
67	"	"	"			M-9		14.66
68	江戸	"	"	杯		L-10		13.23
69	"	瀬戸	飯粒	筒茶碗		L-12		13.71
70	"	"	天目			M-9	14.15	14.09
71	"	"	"	町明皿		N-14		14.10
72	"	"	"	提盤		L-12	(14.26)	14.18
73	"	"	"	湯茶合	全部	M-13		14.16
74	"	"	"	提盤		N-14	(14.12)	14.36
75	"	"	"	"		L-12		14.91
76	"	"	飯粒	提盤		O-13		14.84
77	"	瀬戸	"	"		N-13		14.85
78	"	"	灰粒	皿		(N-9)		15.87
79	"	"	"	提盤		N-11		16.49
80	"	"	飯粒	"		N-12		16.59
81	"	"	"	碗		L-11		16.64
82	"	瀬戸	白磁	心太		"		16.65
83	"	"	灰粒	"		L-13		18.12
84	江戸後	"	"	"		M-14		13.96
85	"	"	青磁	"		N-14		14.06
86	"	"	茶付	湯合		M-13		14.27
87	江戸末	"	"	"		L-13		18.13
88	?	"	"	"		K-10		13.24
89	?	"	湯合	"		N-12		13.35
90	?	"	"	"		(L-12)		13.41
91	?	"	"	"		L-12		13.42
92	?	"	"	提盤		(L-10)		13.56
93	?	茶付	茶付	"		N-13		13.69
94	?	瀬戸	灰粒	碗		D-13		13.72
95	?	"	天目	湯茶合		L-12		14.20
96	?	"	"	湯茶合	全部	M-11		14.23
97	?	瀬戸	白磁又加	"		O-12		16.54
98	?	"	灰粒加	"		"	用-瀬戸	16.55
99	?	"	灰粒	"		"		16.56
100	?	"	白磁加	"		N-12		16.58
101	?	"	"	"		"		16.60
102	鎌倉	"	灰粒	"		U-11		15.86
103	南北朝	中目	青磁	"		X-8		14.67
104	"	"	"	"		Y-7		17.91
105	室町	瀬戸	灰粒	小皿		W-10		13.30
106	"	"	天目	茶碗		W-14		14.65
107	"	"	"	"		W-6		15.97
108	"	"	飯粒	"		U-9		16.00
109	"	"	天目	"		"		16.06
110	"	瀬戸	"	"		Y-7		17.90
111	室町-徳山	"	"	茶碗		X-9		13.38
112	"	"	"	"		X-13		18.96
113	徳山	瀬戸	灰粒	"		V-14		14.83
114	"	"	"	"		U-11		15.85
115	"	"	"	町明皿		W-11		15.88
116	"	"	"	皿		"		15.89
117	"	瀬戸	飯粒	"		Y-7		17.92
118	江戸初	"	"	"		U-9		16.30
119	"	"	"	皿		Y-11		18.62
120	"	瀬戸	"	"		W-6		18.95
121	江戸中	"	"	湯茶合		(U-13)		15.82
122	"	"	"	茶碗		U-9		16.01
123	江戸	"	灰粒	皿		X-9		15.20-1
124	"	"	"	鉢		Z-14		15.46
125	"	"	"	"		V-8		18.97
126	江戸後	"	茶付	茶碗		V-7		13.63
127	"	"	灰粒	"		Y-13		14.80
128	?	瀬戸	"	提盤		W-12		13.40
129	室町	"	"	茶碗		L-8		13.26
130	"	瀬戸	灰粒	"		(M-6)		13.57

序号	年代(写作年份)	产地地	名称	品种	部位	加工场所	年份	台帐号
131	民国	湖南	天目	茶碗		K-8		1374
132	"	"	"	"		L-7		1376
133	"	"	"	四喜蛋		L-8		1378
134	"	"	"	茶碗		M-6		1379
135	"	"	"	"	台部	"		1382
136	"	"	天目	茶碗		L-7		1386
137	"	"	"	"		L-6		1390
138	"	"	殿轴	碗		L-8		1491
139	民国	"	殿轴	碗		D-3		1393
140	民国	"	"	撞钵		"		1419
141	"	"	殿轴	"		D-5		1782
142	民国	湖北	"	早茶碗	口部	L-8		1339
143	"	"	天目	"		J-6		1351
144	"	江西	天目	碗	口部	L-8	1397	1391
145	"	"	"	"		"	1391	1397
146	"	"	"	撞钵		K-9		1402
147	"	"	殿轴	"	台部	J-6		1583
148	江西	湖南	"	四喜茶碗		L-6		1333
149	江西	"	"	"		M-6		1337
150	"	"	天目	茶碗		(N-4)		1421
151	"	"	殿轴	碗		K-8		1494
152	"	"	碗	碗		L-5		1498
153	"	"	"	撞钵		L-4		1571
154	湖北	江西	"	撞钵		"		1321
155	江西	"	白碗	茶碗		魁石西		1827
156	"	"	"	"		"		1828
157	"	湖南	殿轴	"		"		1831
158	湖南	湖南	"	"		碗		1432
159	(湖南)	湖南	"	"		"		1433
160	湖南	湖南	"	四喜蛋		G-5		1443
161	"	湖南	"	碗		撞钵		1449
162	"	"	天目	茶碗		碗		1430
163	"	"	"	"		"		1431
164	"	湖南	碗	碗		"		1434
165	"	"	"	"		"		1435
166	南北	中国	青碗	"		"		1438
167	湖南	湖南	"	撞钵		G-5		1444
168	"	"	"	"		撞钵		1450
169	"	湖南	碗	碗		"		1456
170	"	"	"	"		"		1457
171	湖北	湖南	"	碗		碗		1440
172	"	"	天目	"		G-4		1478
173	"	"	"	"		H-4		1488
174	"	"	天目	茶碗		撞钵		1451
175	湖北	江西	"	"		"		1452
176	"	"	殿轴	碗		"		1455
177	江西	"	"	碗		"		1453
178	"	"	"	撞钵		"		1454
179	"	"	"	"		H-3		1486
180	江西	"	"	"		"		1428
181	"	"	"	"		"		1429
182	"	"	"	"		"		1439
183	江西	"	"	"		H-4		1479
184	江西	"	"	"		J-3		1479
185	湖南	湖南	殿轴	碗	口部	Z-2		1501
186	湖南	湖南	碗	碗		Y-4		1502
187	湖南	湖南	碗	碗		P-9		1318
188	湖南	湖北	天目	四喜蛋		S-3		1557
189	湖南	中国	殿轴	"		(T-3)		1320
190	湖南	湖南	殿轴	"		B-9		1349
191	"	"	"	茶碗		J-4		1358
192	"	"	"	"		"		1380
193	"	"	"	"		"		1381
194	"	"	"	"		"		1387, 1389
195	湖南	湖南	天目	茶碗		"		1388

番号	時代(製作年代)	産地	名	器	部位	銘文	重量	台帳番号
196	室町	瀬戸	文目	茶碗			1297, 1382	1389
197	"	"	"	"		表裏		1394
198	"	"	"	草紙	台部	2-7		1395
199	"	瀬戸	文目	茶碗		P-4		1401
200	"	"	反軸	皿		(2*-15)		1418
201	"	"	文目	茶碗		?		1445
202	"	"	反軸	皿		H-5		1464
203	"	常滑	常滑	皿		L-4		1470
204	"	瀬戸	文目	茶碗		?		1473
205	"	"	"	"		?		1474
206	"	"	草紙	"		R-7		1490
207	"	瀬戸	文目	茶碗		L-5		1493
208	"	"	"	小丸皿	底部	Y-4		1503
209	"	常滑	常滑	皿		X-3		1504
210	"	瀬戸	反軸	"	口縁部	"		1506
211	"	"	文目	"	側部	2-5		1507
212	"	"	"	"		2-3		1519
213	"	"	"	"		X-3		1523
214	"	"	"	"		2*-6		1540
215	"	"	"	"		S-3		1555
216	"	"	"	"		U-2		1596
217	"	"	反軸	"		S-7		1749
218	"	"	"	"	底部	"		1770
219	"	"	"	"		R-6		1783
220	"	"	文目	"		R-13		1805
221	"	"	反軸	"		"		1806
222	"	"	"	"		V-4		1898
223	桃山	"	反軸	南茶碗		2*-11		1331
224	"	"	"	"		(2*-1)		1411
225	"	"	"	碗		2*-14		1441
226	"	"	反軸	南茶碗		I-5		1449
227	"	"	反軸	"		I-4		1471
228	"	"	反軸	"		I-3		1472
229	"	"	反軸	皿		?		1475
230	"	"	"	"		?		1477
231	"	"	反軸	皿		J-3		1477
232	"	"	"	"		X-4		1505
233	"	"	反軸	皿		S-3		1558
234	"	"	"	"		W-4		1584
235	"	"	反軸	茶碗		U-4		1631
236	"	瀬戸	反軸	"		Q-5		1847
237	"	"	反軸	"	口縁部	U-2		1860
238	"	"	反軸	"	底部	"		1861
239	徳川-江戸	"	"	碗		W-15		1459
240	徳川-江戸初	"	"	"		表裏		1460
241	"	"	送付	"		"		1461
242	"	"	反軸	"	底部	2*-12		1701
243	"	"	反軸	"	口縁部	S-5		1778
244	江戸初	"	反軸	"		R-3		1318
245	"	瀬戸	文目	灯明皿		I-5		1446
246	"	"	反軸	"		H-5		1463
247	"	"	"	"		2*-4		1468
248	"	"	反軸	"		I-3		1487
249	"	"	反軸	椀鉢	口縁部	Y-4		1512
250	"	"	送付	皿	"	X-3		1516
251	"	"	反軸	椀鉢	"	Y-5		1521
252	"	"	反軸	碗	口縁部	Y-4		1522
253	"	"	反軸	"	"	U-2		1590
254	"	"	反軸	"		"		1594
255	"	"	"	椀鉢		"		1595
256	"	"	"	"		"		1598
257	"	"	反軸	皿		U-4		1619
258	"	瀬戸	常滑	"		R-6		1762
259	"	"	反軸	"		2*-4		1830
260	"	"	反軸	"	口縁部	Q-5		1846

番号	時代(製作年代)	法名地	石名	器形	部位	出土場所	直径	台帳番号
261	江戸前	瀬戸	辰軸	皿		R-9		1327
262	"	中国	青磁					1328
263	江戸中	瀬戸		徳久利		Z ¹ -5		1324
264	"		白磁			Z-10		1602
265	"	瀬戸	辰軸	茶碗		Z ¹ -13		1712
266	江戸			指輪	口縁部	J-5		1325
267	"	瀬戸		湯呑		(Q-9)		1325
268	"		辰軸	碗		J-4	二片	1442=1
269	"	瀬戸		碗		Z ¹ -5		1500-2
270	"	"	"	碗		Z ¹ -5		1510
271	"	"	朱付	皿	口縁部	Z-3		1515
272	"	"	辰軸			X-3		1524
273	"	"		鉢		S-3		1556
274	"		辰軸	皿		W-4		1619
275	"	瀬戸	"			Z ¹ -12		1669
276	"	"	"			"		1699
277	"	"	黄瀬戸			R-6		1761
278	"	"	辰軸		口縁部	S-7		1772
279	"	"	辰軸			U-2		1883
280	江戸後	瀬戸		湯呑		R-9		1343
281	"	"	"			"		1344
282	"	"	辰軸	筒茶碗		Q-9		1364
283	明治	"		磁鉢		U-2		1880
284	"	"		焼酎甕		"		1881
285	"	"	"	"		"		1882
286	?	瀬戸	天目	茶碗		(Z ¹ -9)		1422
287	?	"	"			?		1476

上表は下記の地域毎に分類してあり27

No.1 ~ No.101 東柱穴址

No.102 ~ No.128 西柱穴址

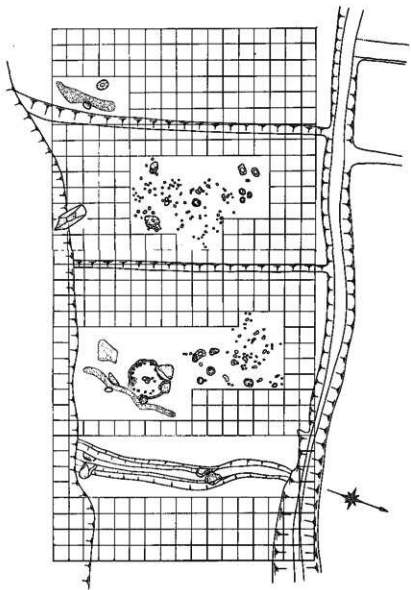
No.129 ~ No.153 1号列石址 特殊遺構・配石址

No.154 ~ No.157 2号列石址

No.158 ~ No.184 堀

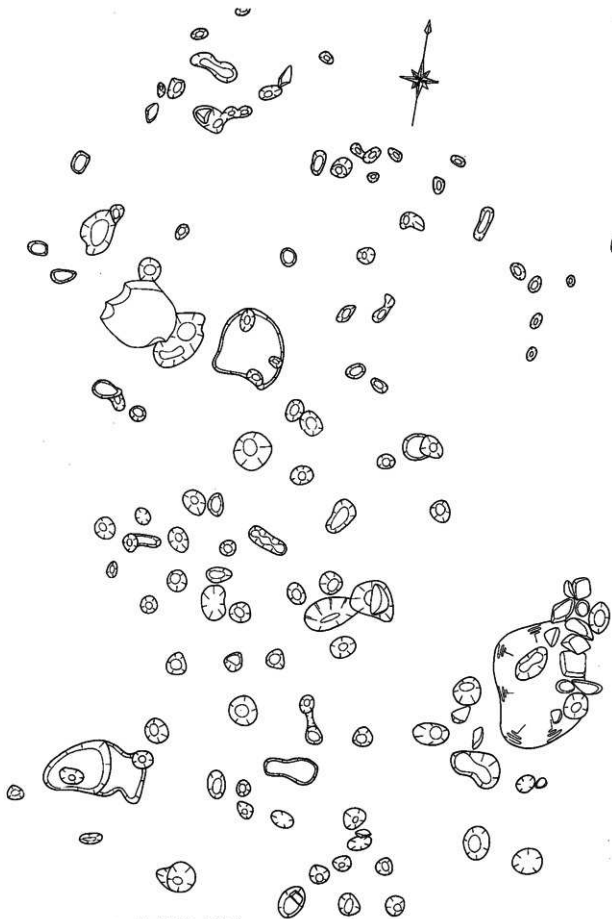
No.185 ~ No.287 遺構外

第1圖 遺構配置圖 (1 : 500)

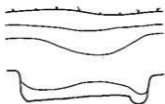
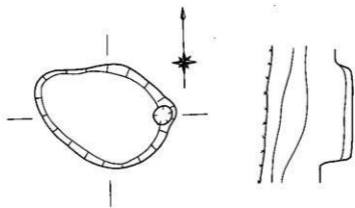




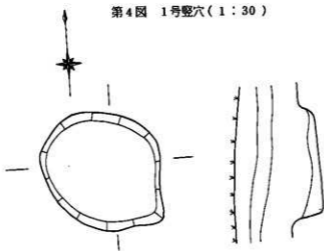
第2圖 東柱穴址(1:90)



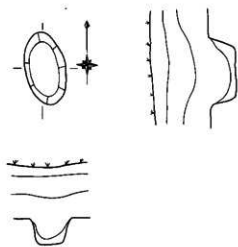
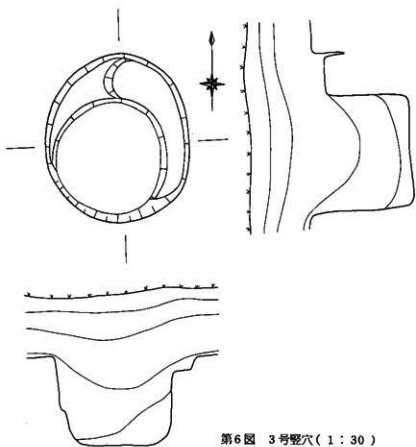
第3图 西柱穴址(1:90)

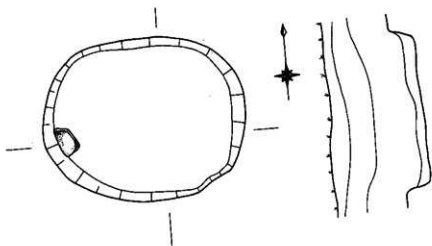


第4图 1号整穴(1:30)

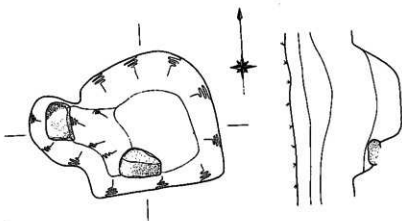
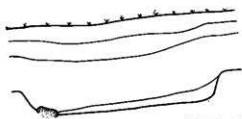


第5图 2号整穴(1:30)

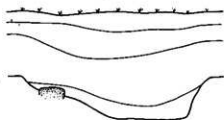


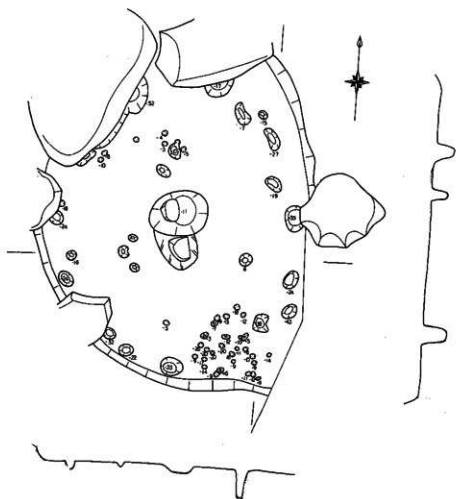


第8图 5号整穴(1:30)



第9图 6号整穴(1:30)





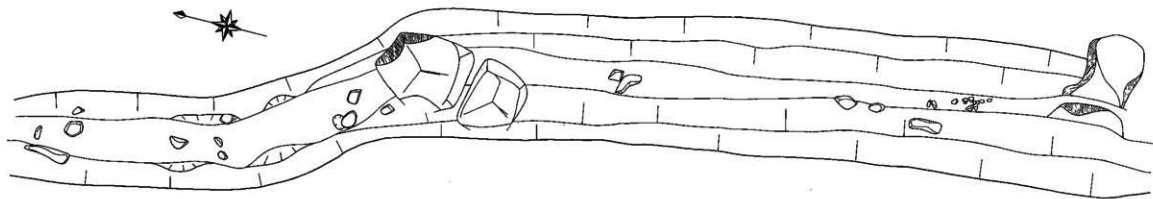
第10图 特殊遺構(1:60)



第11图 配石址(1:60)



第 12 图 1 号列石址 (1 : 60)



第13图 遗址(1:90)



遺跡遠望



下の段遺跡東柱穴群（上） 西柱穴群（下）



下の段遺跡発掘スナップ



下の段遺跡地層調査地点（上），出土石器（下）



下の段遺跡出土土器(表・裏)



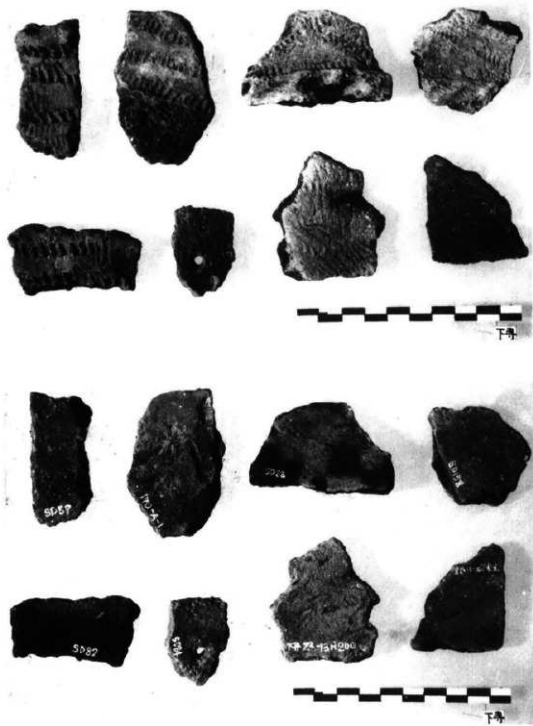
下の段遺跡出土土器（表・裏）



下の段遺跡出土土器（表・裏）



下の段遺跡出土土器（表・裏）



下の段遺跡出土土器（表・裏）



下の段遺跡出土土器(表・裏)



下の段遺跡出土土器（表・裏）

五 升 蒔 遺 跡

第 2 篇 五 升 蒔 遺 跡

目 次

第 1 章 調査の経過	1
第 1 節 調査に至るまで	1
第 2 節 発掘日誌	1
第 2 章 調査の結果	3
第 1 節 遺跡の概要	
第 2 節 縄文時代の遺構と遺物	3
第 3 節 中世の柱穴址	4
第 3 章 調査のまとめ	6
第 1 節 縄文時代	6
第 2 節 中世	6

第 I 章 調査の経過

第 1 節 調査に至るまで

五升蒔遺跡は、大正時代に石棒が発見されたことによって認められた遺跡である。石棒の発見場所は明かでないが、聞く話によれば、小田切川の中段段丘から発見されたようである。このため、中段段丘は大方破壊されているので、遺跡は発掘しても意味がないと云う意見もあった。しかし、今までの発掘例でそんな狭い範囲の遺跡は少ないと云う判断で、今回の調査が行なわれることになったのである。調査は6月30日～8月10日までの予定。

第 2 節 発掘日誌

6月30日、下の段遺跡の調査も大方になったので、器材及び作業用天幕の移動を行なう。

一部はグリット設定の準備。特に地主でもあり近所と云う関係で平沢嘉助さんに御協力をお願いするため、御挨拶にあがる。

7月1日、天神様のある田の下の田の開田は大正の初年に行なわれた。その時多くの石棒と土器が発見されている。その石棒は五升蒔の小祠の脇に置かれ保存されることになった。開田された田は、小田切川の段丘が二段状になっていた地形で、この二段を平にして水田を作った、おそらく、南傾斜で住居を営むに良い地形にあったものであろう。住居址や信仰的な遺構はその時破壊されたものと思われる。今回は開田された西側の一部が原野になっている関係もあって、グリットの設定は、天神様の祠のある北側を西より東に向かって、アルファベットの記号を付す。南北は№20をメインとして南北に振り分ける。本日の発掘は、A-21～27、B-23～28、C-21～27、D-22～28、E-25～29、F-24～28、の各グリットの調査。

7月2日、本日はA-28、B-26～29、C-26～29、D-27～29、H-24～28、I-29、J-25～28、K-25～29、L-26～27までの各グリットを調査。そのうちB-26～28、C-26～28に第1号住居址を発見、H-25グリットに土坑を検出、F-26と28グリットに単独の埋壘（縄文中期）を発見。宮田中学生6名見学、一般の見学者11名。

7月3日、F-31～33、G-31～33、H-31～33、I-31～33、J-28～33、K-25～33、L-25～33、M-28～33、N-28～33、O-28～33、P-30～33、Q-30～33、各グリット調査。そのうちQ-26グリット石棒が単独で出土した。

7月4日、O-29～34、P-31～35、Q-29～33、K-26に石甕伊を発見、この附近を床面に添って拡大して調査したところ第2号住居址を発見。(縄文中期)

7月5日、O-32～33、P-31～33、Q-31～33の各グリッドを調査、P-31グリッドからは凹石、P-32～33、Q-32～33グリッドからは縄文後期の土器が数多く発見され注目された。これに伴う遺構は発見されなかった。

7月 6日、作業は休み

7月 7日、作業は休み

7月 8日、作業は休み

7月 9日、作業は休み

7月10日、作業は休み

7月11日、L-30～34、M-30～35、の各グリッドの調査。

7月12日、N-29～36、P-31～36の各グリッドの調査、縄文中期、縄文後期の土器片が数多く発見される。P-36グリッドに石棒を発見。

7月13日、Q-31～34、R-32～34の各グリッドの調査、縄文中期、縄文後期の土器片が出土、黒色土の落込である。

7月14日、U-35～36、V-35～36の各グリッドの調査、縄文中期の遺物は出土したが遺構らしきものは発見できなかった。

7月15日、W-39、X-38～40、Z-38～40の各グリッドの調査、本グリッドからも縄文中期の遺物が発見されたが、遺構は認められなかった。

7月16日、A-21～24、B-21～24、C-21～24、D-21～24、E-21～24の各グリッドの調査、本グリッドは柱穴群である。

7月18日、第2号住居址の実測、土城、ピットの実測、本日で大方の調査が終え天幕の取片付、器材の水洗、遺物の整理、器材、遺物は一時五升蒔に保管を頼む。

7月19日、白鳥あき子、平沢八千子、友野で全体測量を行なう。

7月20日、白鳥あき子、平沢八千子、友野で前日の続きの測量を行なう。

第Ⅱ章 調査の結果

第1節 遺跡の概要

1. 縄文中期後葉の住居址2軒
2. 縄文中期後葉の竪穴3基
3. 縄文後期の遺構
4. 中世の柱穴址
5. その他、縄文早期末の土器片が出土

第2節 縄文時代の遺構と遺物

第1号住居址

本址は、調査区西端に検出された縄文中期の竪穴住居址である。2.5 m × 3 m の不整形をなし、北隅と、南西隅に張り出し部を持つ。ローム層を基盤とし、壁は垂直に立ち上がり、深さ20 cmを測る。竪穴内柱穴は4個検出されたが、北東部には認められなかった。内、P₃は北傾斜の柱穴である。そのほかの竪穴内南東部には、深さ15 cm前後の周が2.5 mに渡って施されていた。西壁付近に1柱穴が認められたほかは、壁外施設はない。

第2号住居址

本址は、調査区南側斜面近くで検出された縄文中期の竪穴住居址である。南傾斜先端部という立地条件の為、残存状態も悪く、北側の一部で壁が確認されるにとどまった。5 m × 4.3 m の楕円形プランと推定され、北壁に張り出し部を持つ。ローム層を基盤とし、壁高は10数mを測る。床面は一部叩き床となっているが、全体に軟弱である。竪穴内では8個の柱穴が確認されたが、不整形をなすものが多い。炉は中央部に位置し、床面を48 cm掘り込み、6個の花崗岩を組み合わせた石囲炉である。そのほか壁外に2ピットをみる。遺物は第一号住居址よりも、多数出土している。いずれも、縄文中期に比定されるものと思われる。

第一号土址

2 m × 1.3 m の不整形楕円形を呈する本土址は60 cmの深さを測る。砂質ロームの底部は不整形をなし、緩やかな立ち上がりを持つ。底部には35 cm程の河原石が横たわっていた。覆土中より

第二号土城

柱穴址中東側に位置する本土城は、 $1.1\text{ m} \times 1.2\text{ m}$ の円形プランを呈している。ルーム上面より 52 cm 掘り込まれた底面には、河原石が3個検出されている。

第三号土城

ルーム上面では $0.9\text{ m} \times 1\text{ m}$ の楕円形形状を呈しているが、底部は、2個の落ち込みが切り合っている。西側では 1 m 、東側では 1.2 m の深さを測る。覆土中からは、縄文中期に比定されると思われる土器片が発見されている。

第四号土城

$0.75\text{ m} \times 0.9\text{ m}$ と、比較的小型の楕円形を呈し、深さ 1 m を測る。

縄文後期の遺構

1 第1号址、本址はP-32~34、Q-32~13グリッドに発見された遺構である。田の耕土 20 cm 、地場層10を除土すると、黒色土の層位となり、黒色土層中からは、縄文中期後葉の土器が相当量の出土をみたので、住居址の可能性が強くなる。地表下 $60\text{ cm} \sim 70\text{ cm}$ 附近からは、花崗岩の頭大程の自然石が十数個発見される。遺構内に置かれたものとなれば余りにも雑然としている。その他、木炭片、一部に焼土などが発見される。壁の検出につとめたが、ついに壁の確認はできなかった。こうした調査結果から、本址は遺物の捨場ではないかとするのが妥当ではないかと意見に落付いた。遺物は縄文中期末~縄文後期の土器片が混して発見された。

第3節 中世の柱穴址

本址は、A-21~24、B-21~24、C-21~24、D-21~24、E-22~24の各グリッドに発見された柱穴群である。その面積は東西 10 m 、南北 8 m 、 80 m^2 にわたっての遺構である。

柱穴は砂質ルーム層に掘り込まれて作られたものである。柱の大きさは $15 \sim 30\text{ cm}$ 内外のものが全体の50%を占める。 $31 \sim 40\text{ cm}$ 多 41 cm 以上 20 cm 多である。柱穴の内部は掘削状のものが大多数である。なかには、底部が平らなものもあったが、極く少数である。柱穴の掘込は一定せず浅いものは 10 cm に満たないものもある。平均してルームに掘り込まれた深さは $20 \sim 30\text{ cm}$ が大多数である。なかには、 30 cm を超えるものが二・三認められた。柱穴の配列は、一部に $92\text{ cm} \sim 100\text{ cm}$ 間隔で4柱並列するものと、 182 cm 間隔3本並列、 $92 \sim 100$ と 182 cm の組合せのものや、 182 cm と 274 cm の柱間を測るものも認められるのであるが、いずれも、横位の柱穴に対応することが困難な配列である。出土遺物は室町時代の陶器、天目茶碗、灰釉皿等である。

土 器

1は太い燃系文が口辺部に横走している。2は外反する口縁部破片で、浮隆文と同じ円状に施した外周に、細い粘土紐を貼り付けている。第2号住居址より出土している。3は縄文地文の上に竹管状工具による細い平行線が施されている。この文様施文の方法は6、8も同様である。4は、口唇上半載竹管による爪形文を施し、以下は同じ施文工具による平行沈線が施されている。5も半載した竹管の先端により文様が描出されているものであるが、破片上部の施文方法は他とはやや異なる。半載竹管の押し引きのある太い粘土紐が貼り付けられている。6、8は3とほぼ同様の施文がなされている。6の太い隆帯上には地文の縄文がそのまま残されている。7は半載竹管による平行沈線によって、格子目状の施文がなされており、口唇上には同一施文工具によると思われる爪形文が施されている。波状口縁の頂部の下には突起が貼り付けられている。9、10は同様に半載竹管による施文のなされた底部破片である。9は両手の割には大形の器形である。11は半円彫的に器面を飾った口縁部破片で、2と同様、蛇身をモチーフとした渦巻文が施されている。沈線のように見えるのは押し文である。内側には7と同じく、縁がある。12も同じく押し文による文様が描かれているが、2～11より若干時期的に新しくなると思われる。13は波状口縁の破片であるが、口縁部にドーナツ状の凸帯がある点奇異な感じのするものであるが、中期でも終末に近い時期の所産と考えられる。

14は太い沈線によって区画された内部に細かな縄文の施文されたもので、後期でも、いわゆる磨消縄文とは、その文様効果は同じでも、文様の施文手法が異なる。15は、微隆起状になった部分に円形の刺突がなされるものである。16は口縁部に内面、外面にかけて太い凹線による施文がなされ、外面には細い隆線上に圧痕状の刺突が加えられている。18はゆるく「く」の字状に折れる口縁部破片で、凹帯が下方から口唇へかけてのびている。焼成など、15と近似的である。17は表裏に文様が施されており、表には2本の凹線間に細かな縄文が、裏面には斜めの横細な刻目状の文様が見られる。口唇上には椀杉状の刻目がある。19～21は何れも丁寧な浅い沈線による文様が描出されている。細い棒状のものによって施文されており、21の菱形の各頂点には円形の刺突が加えられている。20は器形からして注口形土器の破片であろう。23は櫛齒状の道具によって浅い平行線が描かれている。22、34～26は太い凹線が横走するもので、22、25は内面に施されている。25の胎土中に細かな砂粒が多く含まれ、器面の研磨が見られないのを除くと、他は何れも丁寧な研磨が行なわれている。27～29は底部の破片で、27、28はいわゆる網代底、29は木葉度が見られる。28の底部は中央がかなり盛り上がっている。27は若干上げ底気味である。

以上の土器は、1の燃系文施文のものを除けば、いわゆる中期初頭の一群(1～11)、それに続く中期前半のもの(12)、中期末と思われるもの(13)と、後期の土器(14～26)で、後期のものは掘之内式・加曾利B式土器である。網代底、木葉度は比較的後期に類例が多いことから、27～29も後期の所産と考えてもいいかもしれない。

一方、第2号住居址からは、5、6などの中期初頭の遺物と、加曾利式の土器片が混在して出土しているが、床面上からは27の網代底が出土している。また、第1号土壇からは掘之内式・加曾利B式土器が、第3号土壇からは4の中期初頭の遺物が出土した。(小池政美)

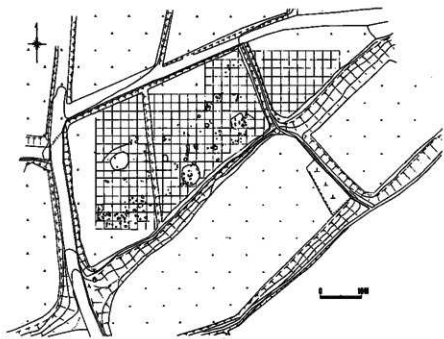
第Ⅱ章 調査のまとめ

第1節

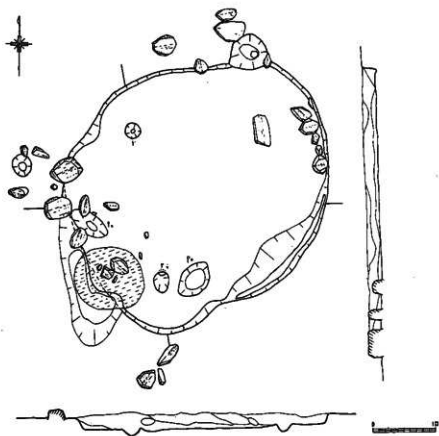
- A 縄文時代早期末の遺物がわずか発見されたが、これに伴う遺構は、確認できなかった。下の段遺跡との関係があることはたしかである。
- B 縄文中期初頭の単独の埋甕が出土。縄文中期初頭の遺構は発見されなかった。
- C 縄文中期末の住居址2軒が発見された。
- D 縄文中期の遺構は確認されなかったが、遺物は検出された。
- E 石棒。今回の発掘で石棒が相当数発見されるのではないかと予想していたのであるが、一本だけしか発見されなかった。私はこの遺跡が縄文中期の祭祀遺跡となるのではないかと考えた。ついそのような遺跡にはならなかった。

第2節

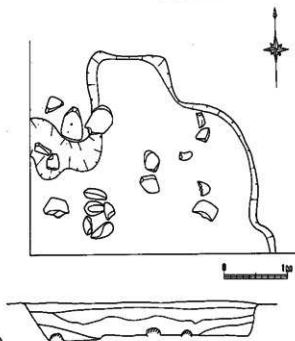
中世では、柱穴をあげないことができる。本遺跡からは、鎌倉時代の陶器、南北朝期、室町期、江戸時代の陶器が発見されているところより、下の段遺跡との関連が深いものと考えられ、今後の研究にまつものがある。



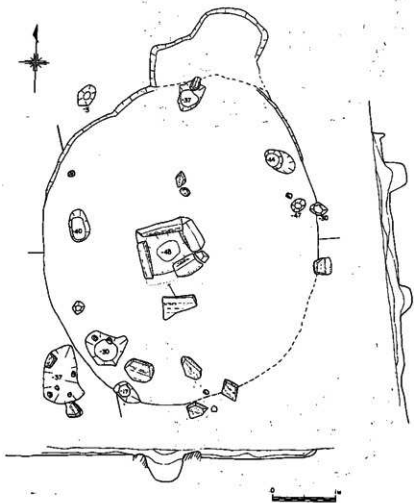
第1圖 遺構配置圖



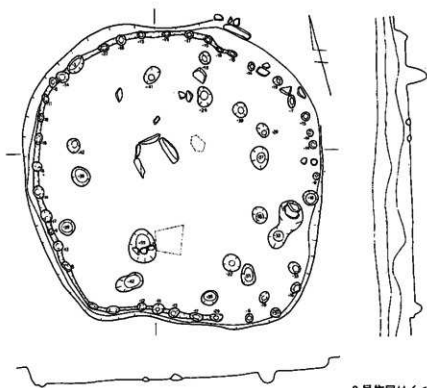
第2图 1号住居址(1:60)



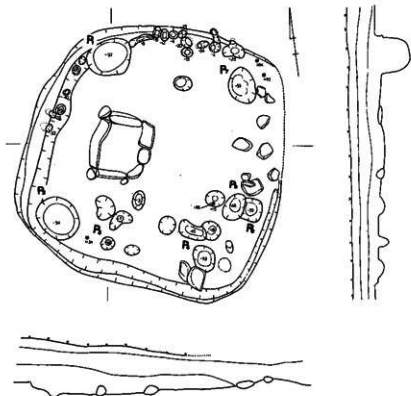
第3图 1号址(1:60)



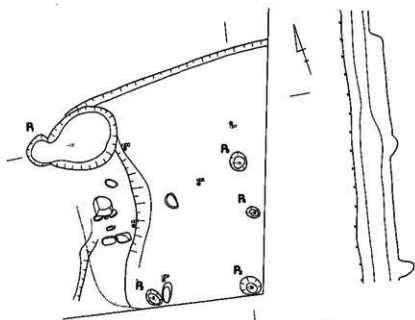
第4图 2号住居址(1:60)



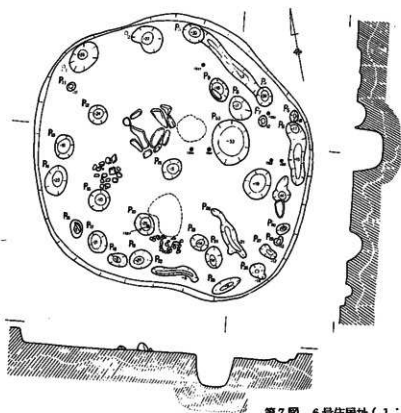
3号住居址(1:60)



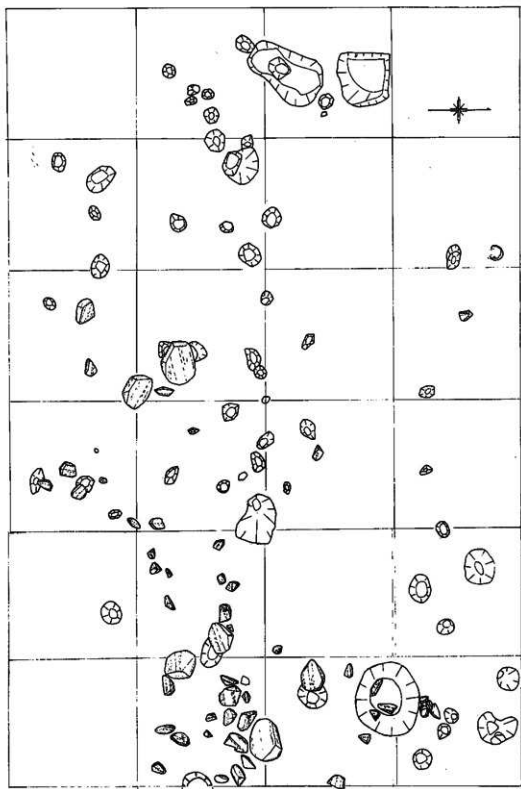
第5图 4号住居址(1:60)



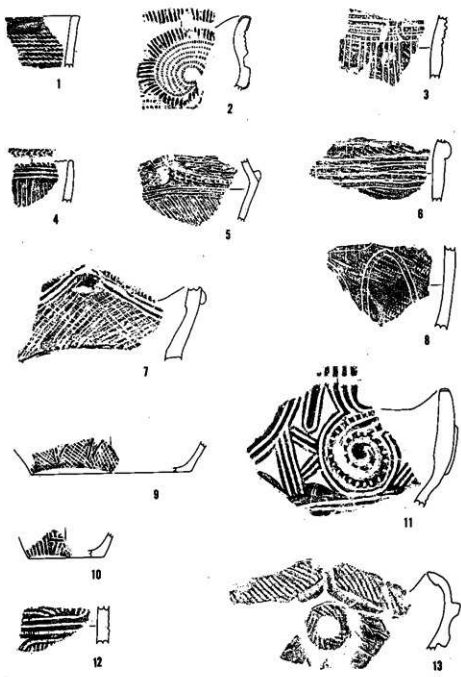
第6图 5号住居址(1:60)



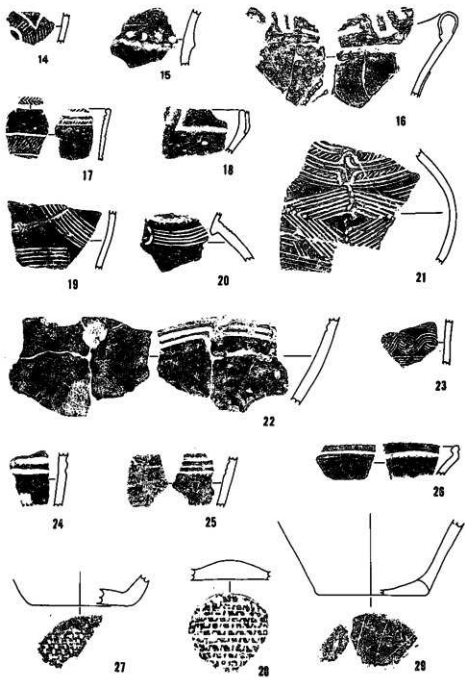
第7图 6号住居址(1:60)



第8图 柱穴址(1:60)



第9图 遗物拓影图 (1:3)



第10图 遗物拓影图 (1:3)



五升荷遺跡遺構全景(上) 柱穴址(下)



五升磚遺跡第1号住居址(上) 第2号住居址(下)



五升藪遺跡発掘スナップ，第2号住居址炉址（下方）

駒 潰 遺 跡

第 3 篇 駒 漬 遺 跡

目 次

第 1 章 遺跡の立地と環境	1
第 1 節 位置	1
第 2 節 地形・地質	1
第 2 章 周辺の遺跡と歴史的背景	2
第 1 節 周辺の遺跡	2
第 2 節 歴史的背景	2
第 3 章 調査の経過	4
第 1 節 調査に至るまで	4
第 2 節 発掘日誌	4
第 4 章 調査の結果	5
第 1 節 調査の概要	5
第 2 節 出土遺跡	5
第 5 章 調査のまとめ	6
第 1 節 遺跡の立地	6
第 2 節 遺物	6
第 3 節 駒漬遺跡の植物	6

第 1 章 遺跡の立地と環境

第 1 節 位置と地形

駒潰遺跡は、長野県上伊那郡宮田村新田 2314 番地に所在する。遺跡は村の西山麓部に位置し、天竜川の支流一級河川小田切川の河床に当る。遺跡に至るには、国鉄飯田線宮田駅より西方 2.8 km、徒歩 55 分、標高 734～745 m、中央高速自動車道の西に接している。

伊那谷の一般的地形については、下の段遺跡の項で述べているので省略する。ここでは、駒潰遺跡周辺の地形をやゝ詳細に窺うことにする。古くは寺沢山の崖麓段層が壺玉塚の丘から駒潰れあたりまで所在していたものを、後世大田川の浸蝕が激しく、ついに壺玉塚と駒潰の丘を残して上の宮の上部落の段丘まで浸蝕したものと考えられる。寺沢川の扇状地は、標高 1650 m、大平山(宮田高原)に源を発し小田切川に合流する。流路長は 3.7 km、比高 913 m、勾配 26 ‰、計画洪水量毎秒 28 トン、扇状地面積 700,000 平方メートル。現在も土砂流出は砂防堰堤工事が進められているにもかかわらず、土砂の流出が止まらない。過去の洪水で何人かの人命を失ったという古文書が伝わっている。寺沢は昔の人々の恐れられていた川であった。扇状地は北は松戸業師塚から五升崎西、杉本、桃屋の東、二つ屋の北小田切川辺、南は駒潰のあたりまでひろがっている扇状地である。大きくは、宮田村は大田切川の扇状地であるが、その扇状地に西山麓より水垂、桐の木沢、唐松沢、トチが洞、日影沢、押手沢、城ノ沢、宮ノ沢、長坂の小扇状地に発達した。これら扇状地には、縄文早期末から人類が住み今日に至っているのである。言うならば、宮田は一部山麓文化でもあるわけである。

第 2 節 地形・地質

駒潰遺跡は、寺沢川扇状地の南端に位置しているが、現況からすれば大田切川、あるいは小田切川の河床とも言い得る場所に所在する。

遺跡の地層は、I、耕土 15～20 cm、II、黄色の砂質土 10～12 cm、III、暗黄色砂質土層 10 cm、IV、黒黄色土 11 cm、V、黒色土層 40 cm、(古い表土である) VI、黄色砂土層、VII、砂混転石 以下砂層に達しない。駒潰地が以外に砂の深い層であることは、駒潰山の下側にあり、小田切川の三角の淀み地形にあったものと考えられる。今回の調査では遺構は発見されなかったが、遺物は出土した。

第Ⅱ章 周辺の遺跡と歴史的背景

第1節 周辺の遺跡

周辺の遺跡では、蛭玉様遺跡、蛭玉様は大田切扇状地の中にぼつんと取り残された形の島状台地である。鎌倉の上部はローム層が堆積している。遺跡は蛭玉様の東傾面と加藤大八氏墓地附近から東に張出し現所に分布する。発見される遺物は縄文中期後葉のものが主なものである。二ツ屋遺跡、宮林署宮田苗圃の土地から現在二ツ屋部落にかけて分布している広範囲の遺跡である。分布調査に依れば、縄文中期後葉の遺跡とされている。高河原遺跡。本遺跡は寺沢川の扇状地に発見された遺跡である。中央道埋蔵文化財調査団の手によって発展された遺跡である。調査の結果縄文中期末の住居址3軒を発見している、この発掘は定められた地域であるわけであるが、中央道ルートを挟んで附近には、相当大きな集落があることが窺われた。上の宮遺跡、寺沢川と日影沢の扇状地に所在する遺跡である。今から二十数年前向山氏墓地東から、灰胎陶器の碗が発見されたことによって、確認されたものである。その後、果樹園の造成等により空町期と思われる石臼が発見されている。また上の宮と言う地名は古くは宮様が住まれた所とも言い伝えられている所でもあるが、それらの遺構は発見されていない。上の宮の東に下の宮と言う地名があるが、ここにも遺構は見受けられない。今は下の宮と言う家がある。この石垣が城郭風の石垣である。下の宮の東南寺沢川の南段丘上に、堀と立派な土塁をめぐらした豪族の居館址が発見された。堀は北側にあり昔は寺沢川の流路まで達していたものと思われ、現在は東の田を作る時に埋めたものと思う田の東端に凹地がある。おそらくこの凹地が堀の東端であろう。西は寺沢川の段丘に掘抜いている。土塁は神社を祀ってある北と西に残っているが、相当規模のしっかりしている土塁である。現在主郭のみであるが、北側にも外郭が存在していたかも知れない。とにかく地名的にも、また、地形的にも居館の存在しても決して悪くない場所である。古くから問題にしていた人もあった様であるが、今回の調査で明かとなった。今のところ館主の名等は明かでない。館の型式からして鎌倉～南北朝期にかけての居館ではないかと考えられる。

今後正確な実測図の上から、発掘によって実年代の究明につとめたい。

第2節 歴史的背景

寺沢と言う地名は何頃からあったものか不明である。今考えられることは、寺沢と名付けられているからには、いずれかに寺が存在したものである。しかし、どんな寺であったか、また、何宗の寺であったかは明かでない。古く考えれば、山岳の宗教で天台、真言のいずれかの宗旨の寺であったかも知れない。寺沢川の奥の滝に打たれて荒修業が行なわれたことも想像される。白心寺に伝わる伝説に、古くは白心寺は寺沢にあったが洪水で下り、下の段附近に寺を営んだが、ここでも押手沢の洪水のとき、流され田中へ下り、さらに、宮田駅の前に移り天正年間現在の位

置に引越したと言う話が伝わっていると言う。白心寺が寺沢にあったと言う確証はない。今のところ寺沢に所在した古寺は幻の寺となってしまった。

- 1) 熊野権現、上の宮に小田切氏が祀っていた熊野権現社があったと伝えられる。場所は、酒井氏の住宅の西、現在新しい住宅が道の上に建られた下の所に杉の森があり、そこに上屋2間四面、その中に社殿があった。明治の合社のとき、姫宮神社に社殿に移されたという。その跡地は田中忠太郎氏が買受けている。最近愛知方面の人に買却し、現在は二軒程の住宅が建っている。小田切氏の祭神が熊野権現と言うのも興味深い。また上の宮に氏神の社殿があったということは、古くは上の宮地籍に居住していたと言うことも考えられる。今のところ確証は得られないが、こういうことを考えて置くことが、今後の研究上重要なことかも知れない。
- 2) 諏訪神社、下の宮の南東寺沢川の流路と小田切川の合流地点に小祀がある。これが諏訪明神である。氏は、上の宮七屋敷の人々の氏神で、今もこの人々によって祭が行なわれている。諏訪明神が何頃祀られたかは不明である。熊野権現と、諏訪明神の祭主の関係はどおの関係か、今その関係を明かにすることはできないが、今後の研究にまたなければならぬ。
- 3) 御歌神社。駒濱の丘に、御歌山座三大権現・開山覚明行者、山内三十八社、社中、年号は明かでない。高さ1.3m、平均巾70cm、花崗岩の石碑が建られている。古くからあったという。御歌信仰の史跡である。
- 4) 駒濱、宮田村文化財指定。駒濱の丘の南側に、花崗岩縦2m、横2.1mの自然石に駒の爪形がある。人呼んで駒が東駒岳より西駒に飛んだ折り、飛切れなく、ここで駒がつぶれたという伝説の史跡である。

第Ⅱ章 調査の経過

第1節 調査に至るまで

宮田村が土地利用計画の一貫として昭和48年以降毎年は場整備事業として大久保2・3・4・8地区を始めとし、北割・南割・町・新田・大田切地区と事業を進める。駒濱遺跡は昭和51年度分として、宮田村が南信土地改良事務所と発掘の契約を結び、昭和51年8月11日より8月20日迄発掘を実施した。

第2節 発掘日誌

8月11日、遺跡の範囲は、宮田村2314番地、2315番地、内に調査構を設定。本日より発掘を開始する。発掘は西側道跡に面した畑より東に向かって調査を進める。調査区域には大転石が多い畑で、面積の大方は桑園である。調査時は桑が植わっていたので、桑株と桑株との間を発掘する。No.1～14まで調査、縄文中期の土器出土。

8月12日、本日は№15～33の調査溝はやゝ東に傾斜している場所である。調査溝は1×2m、深さは1m内外、第V層は黒色土層である。遺物はⅡ層～Ⅳ層に多い。

8月15日、本日の調査溝は№34～43までを調査、この区域は一段の底い区域である。遺物は№1～39号より縄文中期末の土器片が発見された。

8月17日、本日の調査溝は№44～52号までを調査。一番底い区域である。出土遺物は№46より木炭片が発見される。№49より縄文中期の土器片、№51溝からは縄文中期末の土器片を検出、本日で主要個所の調査を終る。

8月18日、調査区域を中心として全体測量を行なう。平沢八千子、白鳥あき子、友野

第Ⅳ章 調査の結果

第1節 調査の概要

本遺跡の性格は、遺物包含遺跡である。この遺跡は昭和28年度宮田村埋蔵文化財の分布調査の折に発見されたものである。遺跡は小田切川の氾濫原であり、しかも、小田切川の現河床との比高があまり変わらない状態にある現象は、だれでもが疑問に思うところである。

今回は場整備事業に伴ない緊急発掘を実施した結果、1600m²の面積の範囲の広さをもつ遺跡であることが確認された。

遺物の包含層は、地上Ⅰ層～Ⅳ層、間に分布。Ⅴ層は黒色土層で古い生活面であると考えられる。この層位からは遺物は発見されなかった。こうした現象は普通は有得ないことである。おそらく、このⅤ層時期には遺跡は存在しなく、その後上流から流出して来た遺物がⅠ層～Ⅳ層に堆積したものであろう。従って本遺跡は、遺構をともしない遺物包含遺跡である。

第2節 出土遺物

№1、出土C、P-10、Ⅱ層、縄文中期末、№2、C、P-13出土、Ⅱ層、縄文中期の打製石斧破片、砂岩。№3、C、P-21、Ⅱ層出土、縄文晩期、白磁、江戸後期。№4、C、P-20、Ⅳ層出土、縄文中期末、№5、C、P-22、Ⅱ層出土、石器破片。№6-1、C、P-10、Ⅳ層出土、縄文中期の土器片。№6-2、C、P-10、Ⅳ層、須恵器破片、奈良時代。№7、C、P-25、Ⅱ層、黒曜石、削片。№8-1、C、P-25、Ⅰ層下、土師。№8-2、C、P-25、時期不明。№9、C、P-26、Ⅱ層出土、縄文中期。№11-1、C、P-27、Ⅱ下、石錘、片磨岩、一方のみに凹が認められる。№11-2、C、P-27、Ⅱ下、打製石斧破片、礫砂岩。№

12. C, P-13, II下, 縄文中期末。№14, C, P-13, IV層出土。縄文中期末。№15, IV層, 縄文中期末。№16-C, P-49, IV層, 縄文中期末。№17, C, P-49, IV層, 縄文後期?。№18, C, P-46, I層出土, 木炭片。№19, C, P-51, IV層, 縄文中期末。

第V章 調査のまとめ

第1節 遺跡の立地

本遺跡は、地形及び地質の項で述べたように、小田切川の底位置に所在する、遺物包含遺跡であることが確認された。このような性格の遺跡は、小田切川に流入する小河川の扇状地には、おおう存在することを、我々に教えてくれた。また、他の扇状地にも、上流の遺跡が破壊されそれが流出し、第2次的扇状地を形成する例は少なくないので、今後注意して行きたい。

第2節 遺物

本遺跡の発見の遺物は、第I層～第IV層にいたる層位に発見された。

出土遺物は、白磁(江戸時代)、この磁器はたぶん耕作で落込んだものであろう。

須恵器(奈良時代)、縄文晩期、縄文後期、縄文中期末の遺物である。

石器は、打製石斧、石錘、黒曜石の削片等である。

第3節 駒浪遺跡の植物

はぎ、おみなへし、おとこえし、うつばぐさ、ししゃ、くさばけ、れんげつつじ、べんけいそう、しろつばき、くろつばき。

(平沢茂 調査)



駒潰遺跡遠景(上) 近景(下)



駒浪遺跡発掘スナップ(上) 御嶽大権現(下左) 発掘参加者(下右)

